人獣伝

abc2148

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは何の前触れもなく異世界に迷い込んでしまった一人の男の物語。

人の形を失い獣になり果て絶望するも一生懸命生きようとして頑張り、時に死に掛け、それは色々な出来事に巻き込まれて大変な目に合うお話です。

相棒は小さな獣で和風ファンタジーを目指します。

目次

1章　人から獣へ
月光の中で ―― 1
夢は覚めず ―― 9
見知らぬ森の中 ―― 18
水を、糧を求めて ―― 26
身体を蝕む ―― 34
2章　獣への適応
堕落する ―― 41
頸木として ―― 49
屍肉漁り ―― 57
小さなお隣さん ―― 65
調査、失敗 ―― 75
森の先輩 ―― 84
人生？為せば成る ―― 93
冬ごもりの準備しよう ―― 100
味の決め手はこれでしょ ―― 106
新発見 ―― 114
異物であるが故に ―― 119
お見送り ―― 129
立つ鳥後を……― 136
どなどなどな ―― 146
腹減った ―― 151
ゴメン、悪かったから ―― 161
な・に・こ・れ ―― 169

1章　人から獣へ

月光の中で

あれは中学生の頃だったか。

学校指定の国語の教科書、その中に載っていた人から虎に変わってしまった男の話を大人になった今でも偶に思い出すのだ。

その男は虚栄心というのか、傲慢というのか、とにかく自己が肥大化し過ぎていた男だったはずだ。

物語の舞台となったのは古代中国、流石に年代までは覚えていないが男は当時の古代中国ではそれなりの官位を得られ一種の勝ち組であった。

しかし男は与えられた立場、地位に満足しなかった。

それどころか自分は偉大な詩人であると自称し、今の地位や立場は私には相応しくないと言って官位を捨て詩人になった。

だが男には詩人としての才が無かった。

碌な詩を作れず懐にあった筈の路銀は何時の間にか底を尽き、このままでは飲み食いできないと悟った男は渋々地方の下級官吏の職に就いた。

もしその時に自らの行いを振り返り反省することが出来れば男は地方の一下級官吏として平凡な生涯を送れただろう。

だがそうはならなかった、男は自分自身の身の丈を知ることは無く下級官吏として過ごす現状を認めることが出来なかった。

そして際限なく肥大した自己により男は発狂して山に消えてしまった。

それから幾年が経ち、偶々山に迷い込んだ男の友人が発狂して虎になってしまった男と再会、そして虎になってしまった男が作った詩を友人が書き留める……そんな話だった。

正直言えば当時の未熟で幼い自分には意味の分からない話だった。

無論古代中国と現代の考えが違うのもあるが、それでも男が人だった事に拘る意味が今一つ理解出来なかった。

国語の先生は文部科学省の学習指導要領に沿って物語の此処では登場人物の気持ちは～であり、～であると話していたが自分は納得出来なかった。

では当時の自分が何を思ったのかと言えば、人から虎に変身するってかっこいいな～、位しか考えてなかった筈だ。

なにせ虎だ、小さな男の子が憧れるカッコいい動物の一つだ。

虎最強！

森の王者だ！
でも生肉って美味しいのかな？
位しか考えていなかったような気がする。
でも仕方がないだろう、当時の私は幼く未熟であり子供であったのだから。

◆

意識が覚醒するとともにコレは良い睡眠でないと最初に感じた。
まず寝間着が良くない、通気性が悪く熱が籠り全身に汗をかいているのが嫌でも分かる。
その次にベッド、いやこれはベッドなのか、反発性が皆無のカッチカッチの板のような物の家で寝ている。
それだけでも最悪なのに申し訳程度の厚手の布すらない、寝ている間に何処かに行ってしまったのだろう。
結論として快適な嗣明をする為に必要なものが二つも欠けているのだ、微睡む事すら

苦痛であり嫌でも起きるしかなかった。
「……最悪の目覚めだ」
未だ覚醒には程遠い頭を使いベッドを探す。
滅多に無い事だが恐らくベッドから落ちて、そのまま寝続けたのだろう。
硬い床で寝てしまったせいか身体が固い、直ぐにふかふかのベッドに戻らねばと考えながら寝ぼけ頭で周囲を見渡しベッドを探した。
だがベッドは何処にも見つからない、そればかりが辺りが薄暗く視界が悪いせいで何も見えない。
「えっと、電気はたしか……」
手探りで電灯のスイッチを探す。
住み慣れた家でありスイッチの道筋は身体が覚えているのでよたよたと手を前に差し出しながら歩いた暗闇の中を歩いた。
「たしか、此処に――」
だがそこら先は言葉が続かなかった、何かに足を取られ転んでしまったからだ。
前に進もうとした身体が足先を起点して受け身も取れずに倒れる。
突然の出来事に足して寝ぼけていた頭では碌な対応は出来ず、顔面から転んでしまい寝ぼけていた意識は強烈な衝撃と共に強制的に覚醒させられた。

「痛くは無い？　痛みはあるけど、そこ迄じゃない？」

家のフローリングに顔面から衝突した筈だが痛みはそれ程ではない、不思議に思いながら両手を床に付いて身体を起き上がろうとし――そこで漸く異常が起きている事に気が付いた。

「なにこれ、土？」

両手の掌に付いていたのは黒っぽい土だ、フローリングの床ではありえない。

そして覚醒した頭に五感を通して様々な異常が知らされる。

自宅の匂いとは似ても似つかない緑の匂い、都会の匂いが全くない、排ガスの匂いがない。

何かの鳴き声が聞こえる、そこには遠くから聞こえる車のエンジン音はなく、何より自宅にあるパソコンのあの小うるさいクーラー音が無い。

何より今此処からは都会の騒々しさが全く見えも聞こえもしない。

「どこだ、此処は……」

立ち上がれば此処が自宅ではない事は一目瞭然であった。

目の前には鬱蒼とした原生林が広がっており左右を見ても、後ろを見ても植物しか見当たらない。

そして自身の服装が就寝前に着た薄手の寝間着ではなく職場に行くときのスーツを

着ている事に気付いた。
なんでスーツを着ながら寝ていたのか、そもそも今いる場所は何処なのか、何で此処にいるのか、頭の中には様々な疑問が芽生えるも先ずはズボンのポケットに手を入れ、スマホを取り出す。
「スマホで現在地を調べれば、取り敢えずタクシーを呼んで急いで帰ろう」
自分が契約しているキャリアは業界最大手、日本全国に居ながら安定した通信網を提供し山奥でも繋がるという触れ込みだ。
実際に契約してからは電波が途切れたことは無く他社に乗り換えるのも面倒臭いので契約の更新を続けていた。
「あれ、動かない、電波が届いていない?」
だが不可解な現状はさらに混迷を深めていく。
日本全国何処でも、という謳い文句のキャリアである筈なのにスマホの電波受信表示は圏外を示していた。
念の為に一度スマホの電源を切って再稼働、機内モードにして解除等一通りの作業を行っても表示されるのは圏外であるのは変わらなかった。
「何で電波を拾えないんだ!」
契約キャリアだけではない、其処彼処に飛んでいる有象無象の無線ＬＡＮも他社回線

の電波も何も拾えない。
これで単純にスマホが壊れていて電波が拾えないのであれば運が最悪であったと愚痴を零すだけで済む。
だがもしスマホが壊れていないのなら、電波が拾えないのではなく電波が全く飛んでいない事になる。
日本に住んでいる限り余程の僻地に行かなければそんな事は在り得ない、だがもしそうであるのなら最悪を通り越して絶部的な状況としか言えない。
「くそ、本当に此処は何処だ。タクシーが拾えないと歩いて帰るしかな……い……」
電波が全く拾えないのは在り得ないと自分に言い聞かせ、感情の昂ぶりによって思考が空回り始めたのを落ち着かせるために一度深呼吸をする。
冷たい空気が身体を冷やし、今度は熱くなった頭を冷やすためにさらに大きく深呼吸をしようと視界が上を向き――在り得ない光景が空に広がっていた。
「月が二つある……」
頭上に輝くのは月――それが二つもあった。
青い月と白い月、形こそは日本で見ていた月とは変わらないが大きさが全く違う。
何時か見た満月、あれよりもはるかに大きく軽く見積もっても何十倍も大きいのだ。
「……何だ、あれ。いや目の錯覚だろ、そうだ、そう違いない。これは夢、出来の良すぎ

る夢だ……」

自分の理解を超えた光景を見た時、人は只々圧倒されるという。

今迄半信半疑であったが、それが事実であると身をもって知った。

人生において一度も見た事がない光景、幻想的としか言えない非現実的な光景に唯々圧倒され空を見続けるしか出来ない。

「だから早く、夢から覚めてくれ……」

それでも現状を否定し、認めないと口ずさむ。

心の大部分を占めるのは感動ではなく不安だ、それでも両目には眩いばかりの月光が降り注いでいた。

夢は覚めず

目の前に広がる光景、これは現実のものなのか。
あり得ない事が起こっている、あり得ないものが見えている。
今言える事は自身が立っている原生林は自力で辿り着けるような場所ではない。
可能性は限りなく低いが拉致された、あるいはアルコールによる前後不覚の状態であれば迷い込んで――いや、それはり得ない。
自分は蟒蛇でありの肝臓の強さに関しては会社で並ぶ者はおらず実はロシア人ではないかと疑われる程だ。
そんな自分が酒で意識朦朧となるのは在り得ないは知っている、であるなら残された可能性は拉致しかない。
だがそうであるなら拉致した人間を何故原生林に放置するのだ。
拉致したのであれば犯人は自分を目の届く場所に置き身代金なり何なり請求を請求するのではないのか。
「現実味がなさすぎる。であるなら夢でしかないのだろう」
結局のところ、考えらえる結論は全て夢に集約される。

実際に現実ではありえない光景、空に浮かぶ二つの月がその確たる証拠である。
地球の日本で生まれ育ってきた自分が身に着けた知識、常識によって今見えている見慣れないもの全てが夢であると結論付けた。
だが夢であると結論付けたものの今も止まらずに五感には大量の情報が流れ込んでくる。
今迄嗅ぎ慣れていたコンクリートやアスファルトの匂いとは違う、圧倒的な自然が運んでくる植物の独特な匂い。
埃っぽい熱気を孕んだビル風とは全く違う、肌を撫でて過ぎ去るだけ冷たく湿ったそよ風。
何重にも重なって耳に聞こえるのは聞きなれた車のエンジン音ではない、多種多様な木々と植物の葉が互いに擦れて生まれる音だ。
夢である筈なのに脳には正常に五感が作動していなければ得られない情報の濁流が流し込まれ告げている。
――目の前に広がる光景は夢でも勘違いでも何でもない、コレが現実だと。
「はッ、馬鹿馬鹿しい。単なる明晰夢だ」
だからといって自身の直感を直ぐに受け入れられる自分ではない。
私は変に世離れはしてはおらず、夢見がちな少年の年齢でもない。

大人として会社で働き、給料を貰い、物を買い、納税し、日々コツコツと老後に向けた貯金をする一人の社会人である。

「あり得ない、あり得ないに決まっている。そうだ、これは明晰夢だ」

明晰夢、睡眠中にみる夢であり、自分で夢であると自覚しながら見ている夢のこと。

それが今、私に起こっている現状で一番理屈が通り説明できるものだ。

「これは明晰夢、単なる夢、だから早く起きればいいだけだ」

いきなり違う世界に迷い込んでしまった、といった世迷言をフィクションとして楽しむ分には問題は無いが、それが現実に自分に起こったというのは流石にどうかしている。

とはいえ夢を見てしまった以上覚めるまで待つしかない、本当であれば泥の様に眠りたかったのだが間違いなく昨日の仕事の激務が応えているのだろう。

眠りが浅くなりこの様な荒唐無稽な夢を見る羽目になってしまった。

そう考えて納得してしまえば何と迷惑な夢か、つまり余りにも忙しすぎて仕事から遠く離れたいと願った脳が生み出したのがこの夢なのだろう。

「何とも極端な夢だな、こちらは夢なんか見ずに熟睡したいのに」

社会人として日々の体調管理は大切な仕事の一つである。

それを怠れば翌日の勤務に支障が出るのは間違いなく、勤務評価がマイナスになって

しまうので全く笑えない。
「さっさと夢から覚めて寝なおそう」
であれば一度夢から起きる必要があるが目を覚ます方法は簡単だ。
今見ている物が夢だと自覚する、それに加えて夢の中で驚きや恐怖を感じれば直ぐにでも目を覚ます筈だ。
そうする事で感情が高まり心拍数が上昇、脳が睡眠状態から活動状態に移行して覚醒に移行する。
唯一の問題は寝起きが悪くなってしまう事だが仕方がない、今はするべき事は夢から目を覚ます事だ。
「……覚めないな、それ程夢に深く浸かっているのか?」
だが目の前に広がる景色は何時まで経っても何一つ変わらない。
空には二つの月が浮かび、そよ風が吹いている。それどころか薄暗かった森がさらに暗くなっていく。
夢であると自覚した筈なのに目が覚める気配は一向にない
「ホラーは苦手だ、早く覚めてくれ」
正直に言って薄暗くなっていく原生林に立ち続けるのは怖い。
幼い頃よりホラーや幽霊と言ったものを苦手であり大人になった今は多少改善され

ているがホラー等を連想させる様な暗闇には出来るだけお近づきになりたくない。
だが周りが薄暗く闇に染まっていく事に恐怖を感じていながら夢から覚める気配を全く感じられない。
人は夢の中で興奮すると、心拍数の上昇と共に体温が上昇し、その結果としてより容易に夢から覚醒してしまう筈なのだ。
実際に暗くなる原生林に自分は本能的な恐怖を感じている、心拍数は嫌でも上昇しているのは間違いない。
もしかしてまだ夢から覚めるには足りないのか。
そうであるなら興奮する以外にも思考を活発化させる事も覚醒の要因になる。
現在進行中の夢のイメージに逆らう物を思い浮かべればいい、夢の流れを思考で歪め逆らう事で夢の構成に干渉すればいい。
夢の形が変わる程強く念じて変化させるには複雑な思考が必要であり、その行為が覚醒を早める効果を持ち目が覚め易くなる筈だ。
だから強く念じる、思い浮かべるものは会社にある自分の机だ。
夢でも仕事場を思い浮かべるなんて社畜染みていると自分でも思うが見慣れたものであり細部まで想像し易いから仕方がない。
――だがいくら強く念じても夢が覚めることは無かった。

目の前に会社の机が現れる事も、目に見える光景が変化する事も無い。
原生林の中にいる事は変わらずに暗闇が少しずつ近付いて来る。
まるで底なしの穴の様な暗闇、一歩でも踏み込んでしまえば際限なく下に落ちてしまいそうだ。
それが単なる錯覚であると頭では理解していても無意識に身体は動き出す、暗闇から逃れようと後ろへ下がり――だが何かに足を引っ掛けて転んでしまった。
「痛い……？」
幸いなことに勢い強くなかった事もあり後ろへ倒れはしたものの地面に両手をついて止まる事が出来たので大きく転ぶことは無かった。
だが地面に付いた両手から誤魔化し様も無い明確な痛みが襲ってきた。
どうやら手を置いた場所に鋭く尖った小石でもあったのか掌には小石食い込んでいて其処から鋭い痛みが伝わってくる。
加えて掌には幾つもの細かな傷が刻まれ、僅かだが血が滲んでいた。
「……痛い。夢だろう、これは」
それは誤魔化しようがない痛みだ。
夢で感じるような掴み処の無い感覚ではない、現実と相違ない痛みだ。
「覚めろ」

不安が膨らむ、それを晴らすために頬を抓る――ただ痛いだけだ。
「覚めろ覚めろ」
頬を軽く叩く、軽い痛みと共に心拍数が上がる。――首を伝って駆け上がる血流を自覚できてしまう。
「覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ」
頬を強く叩く、我慢の限界近い痛みが襲ってくるが何も変わらない――口から水分が失われていくのを嫌でも自覚してしまう。
「覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろッ！　いい加減に夢から覚めろ！」
頬を叩くだけでは足りない、近くにあった樹木に額を打ち付け、衝撃が額から頭蓋に伝わり脳を揺さぶる。
――だが何も変わらない、夢から覚めない、何かもがそのままだ。
「なんなんだよ、これ……。なんなんだよ……」
押し寄せる不安と恐怖が冷静さを削ぎ落していく。
それでも残った理性を総動員し、自分を誤魔化して冷静であろうとした。
――原生林の何処から鳴き声が聞こえてきた。
「ひッ！」

動物に関する知識は殆ど持ってはいない。
犬猫や有名な動物の鳴き声を動画で聞いた事はあるがそれだけであり聞こえてきた鳴き声から動物を特定する知識なんてものは皆無だ。
――だからこそ恐怖の対象にしてしまった、知識の浅さが暗闇で聞こえる鳴き声を致命的なものにした。
何かが森にいる、それが私を狙っているのではないか。
被害妄想じみた考えだ。
それでも冷静な思考が蒸発した今、それが唯一の現実だと認識してしまった。
「あ、ああ、あッ！」
気が付けば走り出していた。
何処まで走ったのか、どれ程移動したのか、そんな事を考える余裕は無い。
ただ息が切れるまで、肺が焼け付く程の熱を持つまで唯只管に走り続けた。
そして気が付けば一歩も踏み出せない程の疲労があった。
何時の間にか立ち止まり膝に手を突いて激しく息を吐いていた。
肺が酸素を求めて荒い息を吐き出し新鮮な空気を求めた。
そして一息ついて顔を上げた先に木の洞があった。
大き過ぎず小さ過ぎない奥行きのある洞、最早碌な思考も出来なかった私は身体をそ

の中に入れ、小さく丸くなる。
隠れるように、自分の存在を消すように。
「大丈夫だ、目が覚めたらベットの上にいる。大丈夫だ……」
木の洞に身を隠しながら小声で囁く。
この悪夢にも終わりが来るはずだ……と自分に言い聞かせ更に小さく身体を丸めた。

見知らぬ森の中

あれから一夜が経った。

暗闇から聞こえてくる遠吠えに対して自分が出来た事は目を瞑り、耳を抑え、悪夢は冷めろと念仏の様に唱えるだけ、それを夜が明けるまで何度も何度も繰り返し――しかし何も変わらなかった。

いや一つだけあった、朝日が昇り暗みに包まれていた森の姿が露わにしたことだけが唯一の変化だった。

「どうすればいいんだ……」

思わず口に出した独り言、だがそれに答えてくれる人はいない。

相も変わらずスマートフォンに届く電波は皆無であり現代人にとって欠かせない知識の引き出し口でもあるネットとの接続は切れたままだ。

それでも極短時間でも繋がった瞬間があるのではないか、見逃していただけではないのかと根拠のない希望を持って画面を見続ける。

電波が届いた瞬間を、この悪夢における唯一の出口であろう瞬間を逃さないように。

それと同時に日が昇ったことで目が覚めた頭でどうして自分がこんな場所にいるの

か原因を考えている。
不用意な危険を冒さないように穴倉に体を丸めて閉じこもっているおかげで考える時間は幾らでもあるのだ。
だがいくら考えても理由も原因すら分からないが目覚める直前の記憶は今でも思い出せる。
会社での仕事が終わり退社、寄り道をすることなく自宅帰り玄関の扉を開け――そこで記憶は途切れていた。
当時の自分は素面でありアルコールを一切摂取していない、前後不覚になって玄関席で倒れるような事はあり得ない。
ではアルコール以外で考えられるのは……身代金目的の人攫いの可能性が一番高い。
だが何故時分なのか、幼児や小学生等の攫い易い子供ではなく成人男性を攫うのは困難であり反撃される可能性も顧慮すれば選択肢として悪い。
それでも態々成人男性を攫うのであれば身代金以外の目的、例えば会社の機密情報を欲しがっているのではないか――とそこまで考えて自分の荒唐無稽な想像が馬鹿らしくなってくる。
たかが食品流通会社の一社員、しかも世界的大企業の幹部クラスであればまだしも日本に数ある中小企業の中の一つだ。

特に最近は世界情勢のきな臭さを鑑みて手広く事業を拡大に取り込んだ結果人手不足感が否めない会社ではあるが。

その、とばっちりで部署関係なく便利屋のように使われ日々の残業が当たり前となり社畜の一歩、いや半歩程手前で留まっているのが自分である。

そんな自分に価値があるとはいえないだろう……考えていて悲しくなってくるが間違ってはいないだろう。

そうして幾ら考えても原因も理由も分らないまま時間だけが過ぎていく。

やはり幾ら記憶を遡ってみても此処に来るまでの記憶は全くない以上、これは夢でしかない。

そうであるならこれ以上考える必要はなく、夢から覚めるまでこの小さな穴倉の中で体を丸めているだけでいいのだ。

◆

更に一夜が明けた。

二日になっても現状は変わらなかった。
スマートフォンの電源はとうに切れ光を出すことがない高価な板になった。
一睡もしなかった事が影響しているのか昨日までの頑なさは何処にも残っていない。
夜が明けて再び朝日が差し込んだ瞬間、夢でしかないと高を括っていた思考消え失せ、代わり芽生えてきたのは不安と恐怖――そして絶望だ。
あり得ない、理解できない、おかしい……、そんな言葉は一夜の内で言い尽くし、今はもう言葉にするだけの気力は残っておらず穴倉の中から外を眺めているだけ。
穴倉の中から覗いた先にあるのは都会では見る事が無い原生林、朝日に照らされた森にはコンクリートもアスファルトが影も価値も存在せず、聞こえてくる音の中には乗車のエンジン音は一切ない。
それはどうしようもない程に此処が住み慣れた土地とは全く異なる場所である事を如実に物語っていた。
森を見ても何も感じることは無い、加えて何かをする気力も湧かない、ただ茫然と外の景色を眺めるだけ。
夢から覚めることを願い、洞の中で小さく丸まり続けて得たものは二日間を無為に過ごしていた結果だけだった。
夢から覚める気配は一向にない、五感から送られてくるものは見慣れない光景と、見

慣れない匂いだけ。
皮肉にもそれらが未だに五感が動いていること、確かに機能している事を証明し続けいた。
そして未だに機能し続ける身体よりも先に限界を迎えたのは精神の方であった。
「……どうすれば」
何もしなかったお陰で考える時間は沢山あった、だがそれが結果として悪い方向に働いてしまった
募る不安と現状に対する恐怖、それらを誤魔化すための方便を頭の中で繰り返し続け自分を欺き続けてきたがそれも限界、平静を保つ筈の言葉は目の前にある現実を否定し、自らの精神が削るのを早めるだけだった。
「水、水を……」
そして何もせずに穴倉に籠っていられる時間はもう残されていなかった。
腹に突き刺さるような痛みと共に空腹が、堪えがたい程の喉の渇きと共に脱水の症状が現れた。
特に脱水に関しては危険な状態であり、あともう一歩で自分は死んでしまうだろうと本能で分かってしまった。
「死ぬ、だけど……死ねば……」

夢の中で死ねば現実に戻れるのではないか、そんな考えが頭に浮かんだ。
根拠はない、身体を襲う強烈な乾きと飢えが正常な思考を妨げた結果として苦し紛れに浮かんできたものでしかない。
衰弱するしかない今の私にとっては心が傾く程の魅力的なものであるのは間違いなく――だがそんな都合の良い事が起こるものかと断ずる理性がまだ残っていた。
最後に残った理性が告げる、此処に迷い込んでからの日々はどうだ。
見知らぬ環境に怯え恐怖し穴倉に閉じこもり身体を小さく丸めて引きこもった。
これが夢だと断じ、夢から覚める事を願い何もせず、念仏のように言葉を唱え続けただけ。
それで何が変わった、それで救われたのか？
時間が経てば解放されると思っていた、その積み重ねた結果はどうだった。
「……夢じゃない」
認めるしかない、受け入れるしかないだろう。
締め付ける様な飢えが身体を襲い、五感を通して知覚できる音と光に横たわる身体に食い込む小石の感触、感じられる全てが本物であると、夢ではないと訴えかけている。
それらを通じて此処は痛み感じる現実であり、夢ではないと理解させられた。
死ねば夢から解放されるなど甘いことは言えない、本当に訳も分からずに死んでしま

うかもしれないのだ。
「動かないと……、今まだ……動ける内に」
だからこそ行動を起こすのであれば今はもう一秒でも無駄にすることは出来ない。
そうなると穴倉に閉じこもった選択は今更ながら間違いであったとしか言えないが、仮に行動に移せたとしても事態が好転する保証は何処にもない。
見ず知らずの場所での行動は困難を極めるに違いない、容易に事が運ぶことは無いだろう、文明に囲まれて育ってきた現代人が簡単に生存できる生易しい環境では決してないだろう。
それでも生きたいのであれば残された時間を無駄には出来ない、此処で行動を起こさなければ待っているのは死しかないのだから。
穴倉で小さく丸まり続けた身体を動かしていく。
固まった筋肉を動かす度に鈍い痛みが走る、それをなるだけ意識しない様にして穴倉の外に、未知の世界に踏み出す。
空から差し込む日の光が冷え切った身体を温めるのを感じながらふらつく身体を動かし原生林へ向かって歩き出す。
今思う事は一つ、死にたくない、唯それだけである。
生きたいと叫ぶ本能に従って生きるために行動を起こさねばならない。

それでも心の隅では、これは諦めた訳ではない、ただ今は異常な事態にあること受け入れるだけだ、と小さく自分に囁き掛けながら原生林の中を進んで行った。

水を、糧を求めて

喉が渇く、耐え難い渇きが身体を蝕んでいる、水を身体が求めている。
空腹に苛まれる、身体の臓腑が無理やり搾り上げられるような飢え、食べ物を身体が求めている。
水は身体の体調維持には欠かせない代物であり、成人男性では体重の６０％が水分である。
だが水分は生きているだけで汗、尿、不感蒸泄等と形を変えて常に体外に排出される。
だからこそ人体は失われた水分を補う為に水を飲む、人間は水分を補充しなければ正常な生命活動を維持できない。
成人男性が必要とするのは1日の最低1ℓ以上の水である。
――そして人は水がなければ　〝3日〟しか生きられない
だが男が迷い込んだのは文明の香りが一切ない原生林の只中。
此処にはミネラルウォーターを詰めた自販機も無ければ固定インフラである筈の水道なんてものは存在しない。
ならば湧き水でも何でもいい、水が流れている所は、雨水が溜まった窪地でもないか

と男は目と耳を凝らして森の中を見渡すがそれらしいモノは一切見つかる事はなかった。

端的に言えば男の行動は擁護しようもなく致命的な失敗だった。

人間の生存な必要な水分の確保、それを怠り現状と夢と断じて二日間何もしなかった人間の末路はどうなるか、それを男は身をもって味わっていた。

既に男の体調は悪化の一途を辿り喉の渇き、眩暈、軽い吐き気といった脱水症状の特徴が表れていた。

今はまだ初期症状で住んでいるが水分が補給されなければ症状は悪化し続ける。

このまま放置すれば重度の脱水症状に陥りに、遠からず死ぬ事になるだろう。

それを理性ではなく本能として男は感じ取っていた。

だが悪化する一方の現状に対処しようにも水を見つけられないのだ、そして男には極限環境下において湧き水や川、窪地に僅かに溜まった雨水以外に飲み水を得る方法を知らない。

詰みである、もうどうしようもない、そんな考えが頭の片隅に芽生えてくるのに時間は掛からなかった。

だがそれでも生きたいという本能が、単純な願望が男の身体を動かす。

男の理性を、意思を置き去りにして本能は精も根も尽き掛けた身体を少しでも遠く

に、少しでも速く動かそうとする

それからどれほどの時間が経ったのだろうか、時間の感覚があやふやになった男には全く分からなくなっていた。

それでも無心に近い状態になった男は当てもなく森の中をゆっくりと進み続ける。

だが何処からともなく聞こえてきた音によって男の意識は急に呼び戻された。

それは風によって森の木々が擦れ合って出る音ではない、それは間違いなく動物の鳴き声であり咆哮か雄叫びに近いものだ。

それが一つではなく二つ、異なる咆哮が森の奥から聞こえて来た、そして最悪な事に聞こえる限りでは男からそれほど遠く離れてはいない。

そして理性が判断を下す前に本王が身体を動かし声から遠ざかろうと動き出した。

もしかしたら男の幻聴だったのかもしれない、だが逆に本物である可能性もあるのだ。

そして聞こえてきた声、咆哮が本物であったとすれば全力で逃げ出さなければならない。

見知らぬ森の見知らぬ生き物、もし肉食動物であれば弱り切った今の男は容易く仕留められる獲物でしかないのだから。

だが森を歩き続け体力を消耗した身体は動いてはくれなかった。

惰性で歩き続けてきた脚は限界を迎え小さな窪みに足を引っかけて転んでしまい、其処から起き上がることが出来ない。
咆哮から逃げるために方向転換をしようにも身体が、足が動いてくれない、それどころか立ち上がる気力すら転んだ拍子に何処に落としてしまった。
「……ははッ、もう、嫌になちゃうよ……」
僅かに残った体力を振り絞り身体が土で汚れるのを厭わずに這いつくばるように動き男は近くにあった木の根元に凭れ掛かった。
僅かに残っていた体力は振り絞って使ったせいで身体のもう何処にも残っていない。
朦朧とした意識のまま空を見れば日も傾いている、もう暫くすれば森は再び暗闇に包まれるだろう。
「……疲れた」
男はもう諦めた、生存の為に行動することを辞めた。
逃げる為の体力は底を尽いた、迷い込んでから時間が経ち過ぎた。
遠くから唸り声や雄叫びが聞こえてくるが最早知った事ではない。
元から無理があったのだ、危機的な常用から生存するのはハリウッドとフィクションにしか許されていない専売特許なのだ。
男の知るサバイバル知識とは動画投稿サイトや雑学を通しての物でしかなく、それは

現代文明の恩恵が受けられる範囲でしか通用しない代物でしかなかった。
「……せめて、痛みを感じさせずに殺してくれ」
諦めた男は目を瞑り眠る、遠くから聞こえてくる咆哮を放つ生物が寝ている間に男を苦痛なく殺してくれることを願って。

◆

どうやら男は死に損ねたらしい。
それなりの時間の間眠っていたようで眠る前と比べて原生林は少し薄暗くなっている。
何より遠くに見える太陽が地平線の向こうに沈みかけていた、もう暫くすれば太陽は完全に沈んで辺りは暗闇に包まれるだろう。
だが此処から何をすればいいのか男には分からなかった。
眠った事で僅かに体力は回復しているがそれだけ、残った気力は僅か、飲み水は一滴も見つからず、全くと言っていいほど現状を打開できる要素は皆無である。

だが男の五感がその間際にあって言語化しがたい感覚を捕らえた。
幻覚、幻聴、幻視、色々な可能性が考えらえるが妙な感覚は薄暗くなりつつある森の奥底を指し示していた。
そして碌に動かない男の身体は何故か妙な感覚に引き寄せられるがまま立ち上がり森の奥に向って歩き出す。
まるで手を引かれて連れていかれるようであった、悩む事は無く足元が覚束ない有様でありながら身体は勝手に動き出す。
本来であれば一度立ち止まり考えるべきだろう、だが男は此処までくればもう如何とでも成れと投げやりな思考でいた。
惰性でもいい、当てがなくてもいい、不思議な感覚に導かれるまま男は歩き続けた。
――そして死の間際で男はか細い糸を掴んだ。
不思議な感覚に導かれるままに歩き続けた先にいたのは死に掛けの獣だった。
大型の肉食動物に比肩する大きさをしている獣は獅子にも、犬にも見えるがどれとも違う男の人生において初めて見る生き物であった。
おそらく森の奥から聞こえてきた咆哮の片割れ、もう一匹此処に居たであろう獣の片方と縄張り争いか、獲物の奪い合いかで争い、傷付き、負けたのだろう。
弱り果てている獣の身体には至る所に傷があり、傷跡も一目見る限りでは深い様に見

える。
だが男が傷付き弱り果てた獣で目を引き付けたのは傷口から流れ出る血だ。
そして今もなお止まらず少しずつ流れ出る赤い血を見て男は無意識に思った。
――アレを飲めば渇きから解放されると。
生食の危険性、感染症の恐れ、様々なリスクを考える余裕は既に男には無かった。
今は唯、身体を苛む渇きを沈める事しか考えられない。
幸いにも殺すに足る凶器はすぐ傍にあった。
地面にある大きな石、持ち上げるのは大変だろうが勢いよく振り下ろせば生き物を容易く殺せる威力を容易く出せるだろう。
気力の尽き掛けた身体に鞭を入れ男は石を持ち上げた、そしてふらつく身体で死の掛けの獣に向けて石を振り下ろした。
獣から悲鳴が上がる、一度では息の根を止められなかった。
だが僅かに身動ぎするだけで暴れ出すことは無い、元からそんな力も残ってはいなかったのだろう。
好都合であった、男は再び意思を持ち上げ振り下ろした、獣が息絶えるまで何度も何度も。そうして漸く硬い頭蓋を砕き、柔らかな脳を潰した感触を振り下ろした石を通して男は感じ取った。

そこから考えを巡らせる余裕はない、男は完全な死体となった獣から流れ出る血を両手で掬い喉を潤して喉を潤した。

まだ暖かい血が喉を通して内臓に行き渡る、待ち望んだ水分に身体は歓喜した。

そして振り下ろした衝撃で石が割れて出来た鋭い石の欠片を男は獣の身体に突き刺す。

滑らかと言いにくい、それでも最低限の切れ味によって獣の身体から肉を小さく削いでいき切り出した肉を口に入れる。

生臭く血の味しかない肉であったが飢えていた身体には充分であり空腹が満たされる

そうして限界まで酷使された男の身体に水と栄養が行き渡る。

味について考えることは無い、口を汚し、手を汚し、無意識に涙を流しながら、生物が持つ原始的な本能に従い渇きと飢えを満たすためだけに男は身体を動かす。

――口に入れた獣の血肉、それが自らを変異させる切欠になるとは知らずに。

身体を蝕む

男の身体を蝕む渇きと飢えは名も知らぬ獣を腹に収める事で解放された。
だがそれは一時的な事でしかなく死にたくない、生きたいと願い続けるのであれば継続的に水と食料を確保する必要があった。
そして男の胃袋の大きさからして死んだ獣の血肉を全て腹に収める事など不可能である。
渇きや飢えもあって普段の男からは考えられない程の量の血肉を飲み食いしていたが1日もすれば全て消化され消えてしまう量でしかない。
何よりある程度身体が満たされてしまった段階で食べ続ける事が男にとって苦痛になってしまった。
それは胃袋の限界もあるが、根本的な問題として適切な処理をされていない生肉を食べ続ける事が苦痛だったからだ。
男は日本人でもあり刺身や寿司、ユッケと言った生ものを出されれば食べる。
だがそれは好物である以前に健康を害さない様に法律によって適切な処理が行われ、さらに飲食店によって入念な調理を経てから提供されるものである。

飲食店や食料品売り場で売られている物とは違い下処理を何もしていない生肉は全てにおいて食べること自体が苦痛であるのだ。
だが空腹と言う極上のスパイスにも誤魔化すには限度があった。
それでも今後の先行きの事を考えれば食べられる内に生肉を食べるしかない。
男は文字通り胃袋がはち切れそうになる寸前まで食べられるだけの肉と飲めるだけの血を飲んでいく。
そして男は顔や両手は血で真っ赤に染めながら手で持ち運べるだけの肉塊だけを切り取ってその場を離れる。
それは仕留めた獣の全てを持っていく運搬手段がなく、仮に運べたとして獣の肉を腐らせず長期間の保存をする術がないからだ。
もしかしたら持ち運ぶ肉会から漂う血の匂いを嗅ぎ付けて男に近寄る動物がいるかもしれないが、飢える可能性を考えれば背に腹は代えられなかった。
そして男は再び森の中を歩きだす。
太陽が地平線の向こうに沈み掛けたせいで薄暗くなった森の中は見通しが悪い。
何があるのか近くに顔を寄せなければ判別が出来ない程であり、そんな状況で原生林の中を歩き回るのは自殺行為でしかないだろう。
だが不安は無かった、死に掛けた獣に導かれていた時の様に言語化しがたい感覚が同

じように原生林の奥に続いているのだ。
何処に辿り着くかは全く分からない、それでも現状において唯一の導きとなった感覚に導かれるままに男は森の奥底に向けて歩き続けた。

◆

あれから何日が経ったのだろうか、森の奥に進む度に少しずつ何かが欠落していくような感覚を男は覚えた。
だが何が欠落しているのかは分からない、日々襲い来る渇きと飢えをどうにかする事で精一杯な男に余計な思考をする暇はない。
既に獣から切り取った肉も食い尽くした、それから男は最早形振り構わずに原生林に生息している小動物を仕留めるようになった。
息を潜め、気配を殺し、感覚を研ぎ澄ませ近寄る小動物に襲い掛かり食らいつく。
始めて独力で獲物となる小動物を仕留めた時は皮を剥ぎ取ってから焼いて食べようとした。

だが人生において一度も動物の解体をしたことがない男が小さいとはいえ動物を解体する事は困難であった。

皮を剥ごうとして食べられる肉をそぎ落とし、肉を潰した衝撃で内臓から余計な血が流れ出た、小さな失敗が積み重なり遅々として進まない作業によるストレスは大きかった。

そして一向に進まない作業に業を煮やした男は解体を中断しそのまま仕留めた小動物に噛みついた。

小さ骨を噛み砕き、生まれ持った歯で肉を噛みちぎる、流れ出る血は貴重な水分であり一滴も無駄には出来ないと口に流し込む。

その行動は男の初日の慌てぶりからは考えられない、本人すら信じられないような変化であった。

だが当の本人は極限状態に追い詰められた人間の適応力が変化だと捉えている。

過酷な環境に適応し生存する為に人間の理性とは異なる生物として人間が持つ原始的な本能が働きかけた結果であると。

効率的であり仕留めた獲物を一欠けらも無駄にしない、何よりこのままでいいと男は思ってしまった。

そうして男は森に生きる小動物を喰らい続けながら何かに引き寄せられるようにし

て森の奥へ、奥へと進み続けた。
その代償としてか奥へ向かうと共に男の感覚は徐々におかしくなりつつあった。
視覚は夜の暗闇であっても空から降り注ぐ星明り昼間の様に見渡せるようになった。
反対に味覚は鈍くなり細かな味を判別する事が出来なくなったが生肉に齧り付く際に味わう苦味や渋さが緩和された事で食事は楽になった。
そうした感覚の変化は生物としての生存戦略によるものか、環境適応なのかは男には判断できない。
それどころか最近は喉が渇いた、腹が減った、眠りたい、等の原始的な欲求が根幹にある思考が頭を埋め尽くし小難しい事を考えるのが億劫になってきた。
それでも水分は常に不足しているので何処かで水源を見つけたいとは考え続けながら奥へと男は進んで行く。
そうしてどれ程の距離を歩いてきたのか男はもう覚えていない。
長かったようにも、短かったようにも感じられ時間の感覚は当てに出来ない程おかしくなっている。
まるで夢遊病の様に、熱に浮かされる様に男は森を進み続け――近頃鋭敏になった聴覚が何時もとは異なる音を拾った。
草木が擦れるような音ではなく何かが流れるような音、それが聞こえた瞬間男は立ち

止まり耳を澄まして音の出所を探った。
そして音の発生源に目星を付けた男は走り出した。
眼を血走らせ、不整地を物ともせずに駆けた先にはか細い沢であり、其処には水が絶えず流れていた。
――水、水だ！
男は躊躇せずに水面に顔を沈めた。
冷たい水が走った事で火照った顔を冷やし、口を開ければ血とは違う混じりけの無い水分が喉を通り身体に染み渡っていく。
そして男は胃袋が水で満杯になるまで飲み続けてから水面から顔を出した。
飢えと渇き、その両方から解放されたことで暫くぶりの余裕を男は持つ事が出来、今度は打って変わって自分の身体から凄まじい匂いがすることに男は気が付いた。
だが長い間風呂には入っていない事を考えれば至極当然の事ではある。
今まで余裕が無かったため無視していたが血、土、汗、その他にも様々なモノが交じり合った匂いは強烈であり正直に言えば鼻が曲がる程の悪臭である。
それに気が付いてしまった以上どうにかしなければ落ち着かない男は身体を洗おうとして沢に再び近付き――今の自分の顔を知ることになった。
「ア、なンだ、こレ、どうナって……」

水面に映るのは人間の顔ではなかった、毛に覆われたナニかが水面に映っていた。
男は自分の顔に両手を持っていけば、水面に映るナニかも同じように動いていた。
それは見間違いでは無い、幻覚でもない、それが自分の顔であると分かってしまった。

そうして人から獣へとなり果てた男の物語が始まった。

2章　獣への適応

堕落する

絶海に浮かぶ孤島、此処には緑豊かな森が存在していた。
周りは海に囲まれた事で隔絶された環境である結果、太古の昔から続く営みが島の中では細々と繰り広げられていた。
――だが緑豊かだった森は変わり果てた、島の外から持ち込まれた外的要因により森はその姿と性質を大きく捻じ曲げられていた。
島を流れる風は荒々しく吹き荒び、海は島を覆うように渦を巻き、島に生きる生物は少しずつ狂気に侵されていった。
そして森は、島は行き過ぎた弱肉強食によって殺伐とした環境に激変した。
だがその本質は弱肉強食を装って入るが蟲毒に近いものであった。
森に生まれた生物は大小に関わらずその有様を捻じ曲げられていき他者を殺し食らう、それを繰り返す度に身体を前よりも強く強靭に変わり、魂は無理矢理に肥大化させられた。
其処には慈悲は無く、情も無く、残忍で、残酷な歪められた狂気しかなかった。

そして森は、森の奥深くに潜む暗闇の意思は、目的は今も昔も変わらずに其処にあり続け森を狂わせる呪詛を吐き出し続けた。

――争い、殺し合い、喰らい合え、満たされぬ渇望、飢餓を原動力とし唯一無二の怪物となれと

◆

水面に映った自分の顔、それは見飽きた人の顔ではなく獣の顔、犬に近しい容貌をしていた。

その異常な変化を知ると同時に今まで疑問にも思わなかった自分の身体の変化を嫌でも自覚してしまった。

女性から白いと言われていた手は黒い体毛に覆われ爪は人間の物には見えない程に鋭く長く尖っている。

頭がおかしくなるような変化は片手に収まらず両手にまで及んでいる、既に両手は人とはかけ離れた形へと変わっていた。

安物の服は既に着ておらず上半身は裸であり下半身には半分以上敗れかけたズボンの残骸を着ている有様である。
だが服の代わりだというのか裸同然の上半身は硬く艶の無い体毛が全身を覆い尽くしている。
そして腰に今まで感じた事がない感覚と共に尾骨辺りから尻尾が生えていた。
両脚の骨格は人間のものから四足動物の後脚の形に変わりかけていた。
水面に映った自分の姿は既に人間ではない、まるでアメリカのB級映画に出てくるような狼男のような姿に変わってしまっていた。
何度目の衝撃、何度目の絶望、何度目の恐怖なのだろう。
此処は夢ではなく現実であることは何とか受け入れた、受け入れるしかなかった。
だからといってこれは無いだろう、人ではない狼男モドキに変わっていく事まで受け入れられない、受け入れたくない！
だが改めて自分の顔を触り狼男の顔を剥がそうとするも痛いだけ、抓っても、毛を幾ら抜いてもその下に人間の顔を見つける事は出来なかった。
一通りの悪足掻きをしてから沢を離れ近くにある木に凭れ掛かる。
上を見ればない事も無かったかのように空は明るかった。
だが何時迄も否定、否認を続ける程の余裕ある訳では無い。

だからこそ考える、今の自分の状態は完全に変化が完了した姿なのか、それとも別の形に変化する最中にあるのか。

しかし幾ら悩んで考えても明確な答えは得られず、それ以前に自分の身体がこの先どう変化してしまうのか考えることがとても怖い。

しかし考えない訳にはいかないのだ。

そうして自分の変化に付いて頭を悩ませていると脳裏に義務教育で学んだ物語が一つだけ浮かび上がってきた。

あれは山月記だったか、傲慢な男が虎に変わってしまい、その境遇を嘆いた物語である。

時代も違えば出典国も違う物語ではあったが書かれていた境遇は今の自分とよく似ている。

そして人間だった虎は物語の中で泣いていた、当時は理解出来なかった男の心の内を今なら理解出来てしまった。

怖かったのだろう、苦しかったのだろう、孤独であったのだろう。

人であった頃に積み上げてきた何もかもが無くなってしまう、その恐怖を、悲しみを誰にも伝える事が出来なかったのだ。

だが物語の最後では自分の事を知る友人に出会えた。それは男にとって待ち望んで

いた救いであり、今の自分の姿を友人に見られたくも無かったのだろう。
そんな事を追い詰められている状況でありながら自分は考えていた。
それは現実逃避の為でもあり、理性が余計な思考を行い、平静を保とうとした反応であったのだろう。
だが余計な思考に集中し自分を客観視できた事でもう一つの異常に気付くことができた。
何処からともなく声が聞こえるのだ、繰り返し何度も何度も。
『考えるな、喰らえ、強く、強大になれ』
空気の振動によって鼓膜を震わせる音ではない。
その言葉は無意識に脳内に響き、身体が、脳が無意識に声に従ってしまいそうになる。
明らかに自然ではありえない不思議な力が声には込められていた。
そして声は絶えず呼び続ける、かける、考えるな、喰らえ、強く、強大になれ、それを何度も繰り返して自分に呼びかけてくる。
――逃げろ、逃げろ、逃げろ!!
頭がおかしくなる、声の異常さを理解した理性が危険であると訴え掛けてくる。
――従っていればいい、声の言う通り殺し食らうだけでいい。
聞こえて来る声に従っていればいいと本能が語り掛け理性を手放せと訴え掛ける。

それは自分が引き裂かれるような感覚だ。
同じ自分である筈なのに声によって意識が、魂が引き裂かれてしまいそうだった。
このまま身も心も畜生に堕ちてしまえば楽になると本能が語り掛ける、人としての理性が本能を拒絶し反発する。
そんな葛藤の最中でも腹は減った。
幾度もなく経験した飢えが身を蝕むと同時に理性が削り落とされていく感覚があった。
そして理性と本能の狭間で葛藤を続けていると鋭敏になった嗅覚が、一つの匂いを拾った。
――血の匂いである。
――距離はそれ程離れていない。
――今駆け出せば直ぐに見付け出せるだろう。
理性は削ぎ落され思考は中断された。
腹を満たす為に身体を支配した本能が匂いの元に向って身体を動かし森を駆け抜ける。
そして見つけた、死に掛けの小さな獣を。
小さな、とても小さな獣。

争い負けたのか、身体は傷だらけで毛から血が滲み出している。
近付いても逃げ出す事はない、逃げ出す体力も既に尽きているのだろう。
これならば直ぐにでも仕留められると本能が語り掛ける。
そして自分は獣に近付き鋭い爪を突き立て――
「きゅるる……」
小さな獣は逃げなかった。
獣は自分を恐れる様な素振りは見せず、逆に近付いて来た。
目は血によって殆ど見ていないのだろう、私の事を親だと思っているのか凭れ掛かると全身の力を抜いて脱力をした。
その姿は余りに無防備であった。
どうして、何故、過酷な森の中では吹けば飛ぶような軽い命の癖に。
幾ら考えても明確な答えは出ない。
そして思考をしている間にも本能は容赦なく語り掛ける
――何を躊躇うのだ、この生物は容易く仕留められる、殺し、喰らい、自らの血肉とせよ。
本能が命じる、自分ではない何かに唆され支配された本能が命じてくる。
それに従おうとする自分がいる、抵抗しなければ、理性を捨てれば楽になれると思っ

ている自分がいる。
なのに、私は、俺は――

頸木として

雨が降っている。

森は朝を迎えた筈なのに薄暗く、ざあざあと曇天の空からは大粒の雨が森に降り注いでいた。

聞こえるのは雨粒が葉を打ち付ける音と地面を叩く音だけ。

そして人だった時とは比べ物にならない程に鋭敏になった嗅覚は雨と土が混ざった独特な匂いを捉えていた。

それは文明の中では感じ取れなかった匂い、人では感知できない匂いではあったが以外にも悪くは無いと思っている自分がいた。

だが雨は良い事ばかりではない。

雨粒が降り注ぐ中に踏み出せば泥と化した地面に加え常に体温を奪われる天気である。

自前の毛皮である雨を弾くにも限度がある、それを超えればずぶ濡れになるだけであり余計な体力を消耗してしまうだけだ。

森の生物達も脳に響く言葉、まるで呪いの呪文の様なものに侵されてはいたが悪天候

の中で動く気配は感じられない。
どうやら最低限の本能は残っていたのか余計な消耗を抑える為に今日は巣の中で大人しく過ごすことにしたのか森は何時にも増して静かであった。
そして自分も今日は大人しく寝床としている洞窟で過ごすことを選んだ。
其処は沢の近くにあった洞窟であり全身が何とか収まるほどの大きさしかないが身を隠すのに問題が無いので今は此処を拠点としている。
そうして水源である沢も近くにあり立地としては悪くないと考える洞窟から自分は外を眺め続けていた。
聞こえて来る雨音がそれ程強くも無い事から豪雨ではないようだが何時止むかまでは分からない。
また体調は今のところ問題は無いが空腹を感じたら雨水でも飲んで誤魔化すしかないだろう。
本来の予定であれば今日も狩をしていた筈だった。
だが朝起きて見れば外はざあざあと雨が降る中、正直に言って雨天での狩りはやりたくない。
日々の生活に余裕があるとは言えない現状を認識してはいても雨天での活動経験は少なく未だ慣れない身体で動けば事故を起こしてしまうだろう。

それに加え雨に濡れてしまえば身体は次第に冷えていき身体の熱を失ってしまうのは避けられない。

その結果、体温を保つ為に余計な体力を消費してしまい空腹に悩まされるのは避けたい。

結論から言えば雨天時は住処とする洞窟で雨が上がるのを待つしかないのが現状である。無駄なエネルギーを消費せず明日に備えて身体を休める、これも一つの手段であり馬鹿にしたものではない。

だからといって洞窟の中で雨が止むのを待ち続けるのは正直に言って暇であった。

人であればスマホでも取り出して目的も無くネットサーフィンをして時間を潰せただろうが人狼モドキになった自分にはそれは出来ない。

それに以前に人狼顔では顔認証システムを通過できずにタッチ操作も鋭い爪が邪魔をして碌に画面を押せないだろう。

そして止めとしてズボンのポケットに仕舞っていたスマホは既に無くなっているのだ。

まず間違いなく意識が朦朧とした時に森の何処かに落としてしまったのだろう。

加えて探し出そうにも当時の不明瞭な記憶しか残っていないので最早不可能である。

気付いた時には文明の利器とは今生の別れを告げており、今できる事は洞窟の中で丸

まって外を眺める位しか出来ない。
そうして朝目覚めてからは洞窟の外を眺めるだけであった。
耳に聞こえるのは雨音と自分の心音……
「くぅるる～」
それと連れ帰ったチビ、昨日助けた小さな獣の寝息だけだ。
姿形からはキツネに近い姿をした動物ではあるが実際の所は分からない。
取り敢えずにチビと名付けた小さな獣は身体を丸めて自分の身体に埋もれる様に寝息を立てていた。
昨日、チビを見つけた直後の身体は弱り切り呼吸の時に僅かに動くだけ、小さな身体を抱えて見れば体温も冷たく感じられた。
此処が都市部であれば動物病院を探し出して適切な治療を受けられたのだろう。
だが自分がいる場所は日本の都市部ではなく自然溢れる森の中であり、治療は望むべくも無かった。
そうした状況から出来た事は雨で身体が濡れない様に洞窟に連れ帰り、自分の身体で温める位しか出来なかった。
だがそれで充分だったらしい、丸まって規則正しい寝息を立てている事からチビは大事には至らず持ち直す事が出来たようであった。

そうなると今度は別の問題が出てきた。
目下の問題は助けたチビをこの先どう扱っていけばいいのかである。
そして自分の頭の中にはいい考えが全く思い浮かばず、色々と考えは浮かんでくるが全く纏まる気配がしないのだ。
そもそもとして自分の今の心境すら正確に理解しきれていないのだ。
何故死に掛けのチビを食べずに助けたのか、それは単なる気紛れなのか、それとも自分はまだ畜生ではないこと自覚する為に生かしたのか。
明確な答えを見つけようとしても頭の中にある考えは纏まらず迷走を続ける始末。
だが幸いにも外は雨が降っているお陰で考える時間は沢山あった。
直ぐに答えが出るとは思わない、だがそれでも時間を掛ければ答えは出るだろうと楽観視しながら雨が降り注ぐ森を見ながら自分は考え続けた。

◆

結果として雨は一日中降り続け、翌日になってから漸く雨は止んだ。

そして一日中散々考えたがチビをどうするかの考えは纏まらなかった。
保護した理由は途中から言い訳となり、それを認めるのが嫌で屁理屈をこね、それに納得できずにまた一から考える。
それは時間が有り余っていたからこそできた無駄な思考の空回りの極致であった。
思考の途中からは自分でも何を考えているのか分からなくなり、いつの間にか眠っていて翌日になっていた。
そして目が覚めた時にはチビはいなくなっていた。
自分の身体の上で丸まっていた筈だが姿形は洞窟の中には無かった。
それを理解した時の胸中は複雑だった、恩知らずのチビめ、余計な事をしたと遣る瀬無い気持ちが沸き上がる。
だが、それは一部に留まり全体から見れば小さなもの、それよりも仕方がないと思う気持ちの方が大きかった。
何故なら目が覚めたら見知らぬ大きな獣の上で寝ていたのだ。
自分よりも大きな身体を持つ正体不明の生物、人であっても事情が分からなければ恐怖を感じて一目散に逃げる状況である。
野生動物に至っては生死に直結する問題であり理性ではなく本能に突き動かされてしまうのは当然のことだ。

そしてチビは人ではなく野生の動物だ、恐怖を感じて逃げ出すのは動物として正しく間違っていない。

「……サビしいナ」

だがお陰で今の自分の気持ちを理解できた、寂しかったのだ。

人である証明、傷付いた動物への慈愛、優しさ等ではない、チビは助けたのは自分が単純に寂しく一人では心細かったからだ。

常識を何処かに置き忘れてきた狂った森の中にいるだけで擦り減っていく精神は孤独を癒し、寄り添ってくれる存在を無意識に求めていた。

だがチビはもう何処にもおらず、残されたのは人狼モドキの自分だけ。

理性は納得をしていたが、それでも寂しさを感じずにはいられなかった。

だが何時までも過ぎ去った事を考え続ける余裕は無い、洞窟から出て朝日を浴びる。

雨はやみ、洞窟の外には見慣れた薄暗く不気味な森が目の前に広がっている。

ならば昨日考えていた通りに自分は狩をするしかない、何より一日食事を抜いた身体が訴えかける空腹を我慢するにも限界が近付いていた。

いい加減何か腹に入れないと身体が持ちそうにない、朝日を浴びて覚醒した身体を動かして森へ向かって歩き出す。

小動物でもいいが出来れば纏まった死肉が落ちている幸運を願いながら。

「くるる――!!」

そして森へ歩き出した自分を見つめる小さな影が一つ。

気付かれない様にしながら後を付けている事に自分が気付くのはもう少し時間が経ってからだった。

屍肉漁り

雨上がりだけあって森の空気は湿り気を帯びていながら冷えていた。
雑多な匂いが雨によって押し流されたのか鼻が感じとる匂いも様変わりしている。
雑多匂いも慣れれば気にならないが雨上がりの空気の匂いも普段の森とは違って独特なものであり趣が違っている。
優劣を付ける気は無いが雨上がりの匂いの方が自分好みであった。
「……でモ、匂イを辿レないのハ困るガ」
だが雨上がりもいい事ばかりではない。
生物が出す臭いの一切が雨によって洗い流され結果として森から流れる匂いは初期化されてしまった。
そうなってしまうと見通しの悪い森の中から獲物となる小動物を見つけ出すのに活躍する嗅覚は使い物にならず狩の難易度は上がってしまう。
雨上がりもまた生きていく環境としては過酷であることには変わりは無いのだ。
だが何時までも洞窟の中で大人しくして居る訳にもいかない。
何より身体にキリキリと訴えかける空腹が我慢の限界に近付きつつあるのだ。

雨水では誤魔化せない、何か食べるものを腹に収めなければ空腹からは解放されない。

そうして自分は理性ではなく空腹で肥大した本能の従うままに嗅覚を頼りにして動き出す。

雨水を含んだことで冷たくぬかるんだ地面を踏みしめながら僅かな匂いも逃さないと注意しながら森を進んで行く。

人狼モドキとなった事で自分の鋭く鋭敏になった鼻は森に生える植物や虫、動物の匂いを感じる事が出来る様になった。

そのお陰で森の中から獲物となる小動物を見つけ出すことが出来ていたが森の中に入ってからは何も感じられない。

見た目に違わず森は広く奥深い深く、それに見合った様々な動植物が生息している事が短い期間ながらも過ごした事で分かってきた。

だからこそ森では闇雲に動けない、目に見える範囲に見えるのは森の植物と虫だけであり動物は滅多に見つける事は出来ない。

偶然見付けたとしても殆どが鼠のような小動物であり、それ以上の大きさを持つ他の動物は身を隠しているのか滅多に見たことは無い。

それは水に映った人狼モドキの姿を見て正気に戻る前の記憶も含めてだ。

だからこそ今の自分が狩で狙えるのは数の多い小動物が中心となるのは仕方がなく、食いでが小さく満腹感を得るのであれば纏まった数を仕留める必要があった。

だが人狼モドキになったとはいえ狩が上手くなった訳ではない、日々何とか空腹を紛らわせる位の成果しか得られず満腹には程遠いのが現状であった。

そんな理由で余り良い成果の無い狩に全てを掛けるつもりは自分には全くない。

現状で最優先するのは食べ物を得る事であり結局の所、食べられる物を見つけ出し腹に収めることが出来ればいいのだ。

その為に嗅覚を常に意識しながら森の中を進み狩の獲物である小動物は勿論の事、死骸から出る血の匂いを感じ取ろうとしているのだ。

不思議な事に今迄の生活において大型動物の死骸が放置されている事が多々あったのだ。その死骸には不審な点が幾つもあり、どの死骸も身体の一部だけが食い千切られて放置されているのだ。

それはまるで摘まみ食いのようであり、獲物を仕留めた捕食者は主に死骸の胸、心臓とその周辺の肉と臓器の一部だけを食べて残りは放置しているのだ。

この食べ方には何らかの理由があるのか、例えば中心部以外は猛毒であり食べたら死んでしまうのか、それとも捕食側の単なる偏食なのかは明確な理由は分かっていない。

無論、死骸が放置されていた理由が気にならないと言えば嘘だが、考察をする時間も

余裕も無いので後回しにしている。
それに今まで放置された死骸を食べ続けて毒か何かで苦しむことは無かった事から問題にする気が起きなかったのもある。
そんな事もあり森に入ってからは主に小動物か死骸の匂いを中心に探し続けていたが成果は皆無、森に入ってからそれなりの時間が経過していたのか空を見れば日は傾いていた。
日暮れまでに残された時間はまだある、だがこれ以上森の奥深くに入ると住処にしている洞窟から離れすぎてしまう感覚があった。
残念ながら此処が限界だ、これ以上先に進めば洞窟に帰るのが難しくなるので足を止めて加減引き返すべきかと考える。
――だが立ち止まってから暫くすると鋭敏になった嗅覚が一つの匂いを捕らえた。
「見付ケた」
それは血の匂いであった。
腐敗臭を嗅ぎ取れない事から死んでから時間は余り経っていないのだろう。
血の匂いがする場所に向けて走り出し、森の奥へ少しだけ進んで行った先には腹部を大きく食い千切られた死骸が一つ放置されていた。
どうやら死んでいるのは猪のような姿をした生物だったらしく口から上下に生えた

６本の鋭い牙が特徴的な姿をしていた。
死骸の体重は目算１００ｋｇを軽く超えているだろう。
それだけの大きさがありながら食い千切られているのは身体の中心部、心臓とその周辺の肉だけであり他の部分は手付かずで放置されていた。
これだけあれば、さぞ食べ応えのある獲物に違いないのに全体の一割にも満たない量しか食べないのは捕食した相手が偏に偏食家なのだからだろう。
そのお陰で食料に有り付ける身としてはありがたいが、仕留められた方は溜まったものではないだろうな、と考えながら死骸に食い付いて肉を食べる。
「ハイえなだナ……」
思わず自虐の言葉が口から出てくるか間違ってはいない、今の自分はどう見てもハイエナでしかないからだ。
これがアフリカやアマゾンであれば獲物を横取りしている様にしか見えないが文句を言ってくる人も動物もいないので食事は静かなものであった。
血抜きをしていない生臭い肉を口に入れるのも味覚が鈍化したことで気にならない、味と触感に目を瞑りながら無心になって死骸の肉を食べ進める。
身体が変化したせいなのか人であった時とは今の人狼モドキの身体は比較にならない程燃費が悪くなっている。

胃が破裂する程の肉を食べても消化不良になることは無く、一食でも抜いただけでも空腹が襲ってくる。

今できる対策としては食べられる時には大量に食べ、持ち帰られる分の肉は持って帰るくらいし出来る事は無い。

可能であれば死骸全てを持って帰りたいが運搬は無理であり、加えて鮮度を保つことも不可能で腐らせるしかないのが現状だ。

今の人狼モドキの身体であれば腐りかけた肉でも食べられるような気はするが、流石に試したくはない。

それに放置され多くの肉を残した死骸だが、これもその内無くなるだろう。

この死骸を狙っているのは自分だけではなく、今も五感を通して自分以外の生き物気配を確認できるが不意を突いて襲ってくるような気配は無い。

何より死骸を狙って集まった生物であるため争いはしたくは無いのだろう、それに加えてどうやら森に棲む生き物達にとって自分は得体の知れないもモノらしい。

未知の相手に対して敵対したくない、もしくは相手にすると面倒くさいと思っている節がある彼らにはあるようで息を潜めて此方を伺っているに留めている。

この動きに関しては正直に言えば助かっていた。

正直に言えば自分に戦闘能力などは皆無であり、その正体は身体が大きいだけの人狼

モドキでしかない。
だが彼らが一方的に誤解をしてくれるならそれでいい、お互いに無用な衝突を起こさず遠巻きに此方を伺っているだけでいいのが本音である。
それでも長居は出来ないので他の生き物と鉢合わせない様に持てる分だけの素早く肉を確保して死骸から離れる。
そうして死骸から離れて住処としている洞窟へ向かっていく最中、後ろからは死骸に集う生物達の咀嚼音が聞こえ続けた。
肉を食い、両手に持てるだけの肉を持って住処である洞窟へ帰る。
それが今日出来た事であり、この先も続いて行く日々なのだろう。
もし肉を手に入れる事が出来なければ沢の水で腹を膨らませて誤魔化すしかない。
だが死骸の肉をこの先も確保できる日が続いていくのかは分からない、運よく死骸に有り付ける機会はあと何回あるのだろうか。
先を考えれば考える程先行きが不透明である事が明確になっていく、綱渡りの様な日々に
対して不安と心細さしか感じられない。
「どうスれバ、いイんだ……」
口からはそんな言葉が漏れ、その言葉自体の呂律も怪しくなっていく一方である。

遠からずに言葉も失ってしまうのだろうかという不安も芽生えてくる。
だが対処法も解決策も何も知らず分からない事ばかりであり、悩むだけ時間の無駄でしかなかった。
そんな事をつらつら考えながら重い足取りで住処としている洞窟へ歩いていく。
――だが帰路の中、新しく頭頂部に生えてきた獣耳は自分が出す足音以外の音を拾った。
それは自分の足音とは違って小さく軽く――気付かれない様に振り返れば昨日助けたチビが隠れながら後ろに居るのが見えた。

小さなお隣さん

実の処、住処としている洞窟から森へ移動する最中に後ろから追跡してくる何かがいた事は薄々感じていた。

鋭敏になった五感に加え第六感というべき勘、たいして長くも無い人生において感じた事などなかったそれが反応していたのだ。

だが後を付けている何かから逃げようと思わなかったのは敵意と呼べるような感情を感じなかったからだ。

森に生きる生物は自分が近付けば何らかの感情、或いは匂いとも呼べるものを無意識に分泌していた。

敵意の匂い、怯えの匂い、怒りの匂い、それらを嗅ぎ分けることが出来るようになったのは最近になってからだ。

そして、それらの匂いが後を付けてきている何かからは嗅ぎ取る事が出来なかったのだ。

敵意でもない、怯えでもない、怒りでもない、判別できない匂いに悩まされながら最終的に出した結論は無視する事であった。

気付いていない振りをしながら森の奥へ進んで行き、ふと何気なしに振り返った瞬間に草木に隠れる見た事がある尻尾を見た事で正体がチビだと分かったのだ。
そして帰り道でもう一度後ろを振り返ると今度は隠れる事無くチビが後ろにいたのだ。
「……」
「……」
互いに見つめ合いながら何も発しない、そんな摩訶不思議な間合いにどの様な反応を返すべきなのだろうか。
てっきりチビは怪我が治ったから森へ帰ろうとしていただけであり、後を付けていたのではなく帰り道と重なっていただけだと思っていた。
だが途中からは分かれて森の中に帰る事も無く現実として今もチビは後ろから付いて来ている、加えて言えば森へ帰る様子も見受けられない。
もう自分に一度言いたい、チビにはどう接したらいいのだろうか？
だがいくら考えても良い答えは浮かばず、分からない、どうしよう、と考えている間に身体は動いていたのか住処としている洞窟に帰ってきた。
そして足を止めると後ろから付いて来る足音も止まり、振り返れば微妙に距離を取った所にチビがいた。

「……はラ、へったカ？」

試しに声を掛けてみた。威嚇などせず比較的現状出せる穏やかな声で。

「くるる――ッー」

チビは小さな体を膨らませて威嚇してきた。

だが本人、いや、本獣にしてみれば精一杯威嚇しているつもりなのだろうが小さな身体を大きく見せようと毛を逆立てているだけであって怖さを感じる事は無い。

だがその対応が間違っていたのかさらに毛を逆立てて大きな鳴き声で威嚇するチビに自分は戸惑う事しか出来なかった。

本当にどうしたらいいの？

取り敢えず威嚇してきたチビを見なかったことにして本日の戦利品である肉を抱えて住処である洞窟に帰る。

生肉を保存する冷凍庫なんて便利な代物はないので基本的に持ち帰った肉は外に放置するしかない。

だがそうすると生肉は直ぐに傷んでしまうので僅かでもお腹がすいた瞬間に胃袋に押し込めるしかない。

そうして肉を洞窟に置いた次に考えるべきはチビの取り扱いだ。

流石に洞窟の中にまで入って来る気は無いようで洞窟に入るとチビは離れ――直ぐ

近くにいつの間にか出来ていた穴の中に入っていった。
どうやら自分が住み着いている洞窟、その近くにあった窪みに寝床を作ったようだ。
周りに土が盛り上がっているから元からあった小さな窪みから掘り進めて拡張したのだろう、住み着く気まんまんである。
だとしたら疑問がある、何故チビは態々自分の近くに住み着いたのだろうか。
自分は森の中に生息している生物の中では上位とはいかないまでも中位程度の大きさ持った身体である。
成り行きと迷走の果てにチビを助けたとはいえ体の大きさから危険を感じていないのは不思議である。
いや、もしかしたら熟慮の果てにチビは自分を与しやすい奴だと考えたのかもしれない。
現在のチビは文字通り身体が小さく、有体に言えば一方的に捕食される側である。
そんな弱肉強食な森に中でどうすれば身の安全を確保できるか、そう考えた場合に都合が良い生物がいた、それが狼男モドキである自分だ。
この生き物は襲い掛かることもなく、何故か助けてくれて、近くにいれば森の動物からは襲われない。
チビがそう考えたとすれば一応納得は出来る。

だからといってチビは自分に対して完全に警戒を解いたわけでも気を許したわけでも無い。
あくまで付かず離れずの距離を保ちつつ相対している現状が生存に適していると判断しているのだろう。
そう考えると、強かでありながら賢いものだと感心するしかない。
小さな体であるからこそ森で生きるために知恵を絞っているのだ。
その生き様は素直に見習うべきだろう。
そんな事を考えると同じくしてふと思った。
もしかしたらもう一度触れ合えるのではないのか、此方から歩み寄れば仲良くなれるのではないかと。
だから試しにチビに向ってゆっくりと腕を伸ばしてみる。
「くるるッ！」
しかし当然のことながらチビに警戒されただけだった。
逃げ出すことはなかったが、これ以上うかつに踏み込めば此処から逃げ出してしまいそうな雰囲気を醸し出していた。
「わかっタよ……」
伸ばした腕を戻す、そうすればチビは一応警戒を解いてはくれた。

取り付く島の無い対応ではあったがそれでも触れ合いたいという願いは自分の胸の中に燻ぶっていた。
いや、それは建前でしかない、本音は触れ合って孤独を癒してほしかった。
だが現状ではこれ以上の接触は望めない、信頼関係を築けていない現状では今の距離感を維持するのが賢明な判断なのだろう。
そう考えながら洞窟に戻ると夕食として持ち帰った肉に口を付ける。
持ち帰った肉は明日の朝までしか持たない量しかなく、それが減っていくのを心細く感じながら食べるしかない。
それでも食事にありつけないよりかはマシだと考えながら食べ続け――ふとチビが何を食べているのか気になった。
無論生き物である以上食べて飢えを満たさなければ遠からず餓死するのは避けられない。
ならばチビも何かを食べる必要があるが、身体の大きさからして狩が出来るようには見えない。
もし狩が出来ないのであればチビは一体何を食べているのだろうか。
ふとした瞬間に思い付いた疑問ではあったが今は気になって仕方がない。
であれば疑問を解消すべく洞窟から少しだけ顔を出してチビを盗み見てみた。

「……な二、それ？」
驚いた事にチビは肉ではない何かを食べていた。
一見した感じでは木の実様に見えるが色は紫色で非常に毒々しい。
――それ食べられるの!?
と新たな疑問が沸き上がるが取り敢えず最初の疑問は解消できた。
また同時に木の実や果実には今迄手を出していなかった事に気付かされた。
どうやら見た目に思考も引っ張られていたようで木の実を食べるという発想も湧かなかったが、何より見た事もない植物を目にして変化した本能が無意識に警戒していたのだ。
そんな理由で食指を伸ばさなかった木の実をチビは巣穴から出して噛り付いていた。
身体の小さいチビが問題なく食べているから可食できる実なのだろう。
そうだと知ってしまうと今度は木の実の味が物凄く気になってきた。
自分でも食べられるのではないかと考えた瞬間、自分は巣穴からはみ出ている木の実の一つに無意識に手を伸ばしていた。
「くるる――ッ！」
当然の様に集めてきた食事を奪われると思ったチビに物凄い勢いで吠えられた。
だが間違ってはいない、懸命に探して取ってきた食べ物を横から奪われるのは誰でも

嫌に決まっている。
責められるべきは無遠慮に手を伸ばした自分なのだ。
「交、かン」
だから持ち帰った肉の幾分かをチビの目の前に置いた。
等価交換、或いは現物交換とも言える行動だが木の実とは違う肉を見たチビは威嚇を辞め、目の前に置かれた肉の匂いを嗅ぎ始めた。
クンクンと嗅いでいるが拒否する様子は無さそうだ。
それでも勝手に取るのではなくチビにも見えるようにして木の実を一つだけ取った。
手に取った木の実を改めて見ると一つの大きさは片手に収まる程度の大きさであり確か森の中で似たようなものを幾つか見た気がするものであった。
そして口に入れてみれば苦みも酸っぱさも無く、仄かに甘い……かもしれない味がした。
あまり美味しいとは言えないだろう、それでも肉と水以外の物を口に入れて食べる事が出来たのは素直に嬉しかった。
そうであれば今後は肉以外にも木の実や果実を探してみるのもアリかもしれない。
そう考えて初めて自分が視野狭窄に陥っていたのだと自覚できた。
「く、く、くーッ！」

そんな深く考え込んで居るところにチビの凄い声が聞こえて来た。
何かあったのかと心配になってチビの姿を見ればなんかすごい勢いで肉に噛み付いていた。
いや、なんとか噛み千切ろうとしているのが見て分かるが肉が硬いのか噛み千切れずにいる。
その顔は凄い事になっていて、ムチィーと擬音が聞こえそうなほど顔を膨らませながら頑張って肉を食い千切ろうとしているのが分かった。
「ナんてかオ、しれルんだ」
チビの間抜けで可愛い姿を見ていた自分は気が付けば笑っていた。
深い理由は無い、単に顔が凄く面白くなっていて、それが自分の笑いのツボを突いただけだ。
それでも笑いが止まらず、嬉しさが込み上げてきた。
――ああ、まだ笑えた。
こんな世界に来て、身体が変わってしまって、不安と諦め、絶望しかないと思っていた。
それでも自分は笑えた、チビの変顔を面白いと感じる感情をまだ持っていた。
それが溜まらなく嬉しかった。

「ありガとう」

孤独には慣れたつもりではあったが、そんなことは無かった。

我慢に我慢を重ね取り繕っているだけだった。

そして我慢もいつかは限界を迎える、その時が正気を失くす時だろう。

それでも、そうだとしても今はまだ頑張れる、もう少しだけ頑張れそうだと思う事が出来た。

肉に夢中になって聞こえないかもしれないが、それでも久しぶりに笑わせてくれた小さな獣に私は感謝の言葉を告げた。

調査、失敗

チビと食べ物交換を行った翌日、本来であれば何時もの様に肉を求めて森の奥に移動する予定であった。

だが今日は違う、朝から森の中で歩きまわって集めた成果が住処である洞窟の前で小さな山を作っている。

紫色を果実に、毒々しいキノコ、葉先が大きく膨らんだ草の様なモノ、実に様々なモノが集められた光景は八百屋の様にも見えるだろう。

「くるる?」

「食えルモノを探しテいた」

獣であるチビには言葉が通じないと分かってはいる。

しかし、お前は一体何をしているの？　と言わんばかりの視線をチビに向けられて反射的に返事をしてしまった。

別に知られたとしても大きな問題はない、単純に食べられるものを増やそうと手当たり次第に森から食べられそうな物を集めてきただけだ。

供給が不安定な肉に依存せず身近にある果実や草、キノコといった植物が食用になる

のであれば非常時に飢える可能性を小さくする事が出来る。
そう考えて森の中を歩きまわってみればそれらしいものは沢山見つけることが出来たが、少なくとも食べられそうな見た目をしているだけだ。
実際に食べられるかどうかは分からない、それを判断する為にも集めてきた果実や木の実等が食べられるのかどうか調べる必要があるのだ。
「……でモ、これ食べレルのか？」
だが調べるとは言ってもこの場には食品検査装置や分析機などは一切ない。
となれば古典的な方法として実食するしかないのだが、食べる以前に安全かどうかも分らない物を実食する事に及び腰になってしまうのは仕方がないだろう。
出来れば森の生態に詳しい先人でもいれば教えてもらえた可能性があったかもしれない。
しかし生憎と森で過ごした短くない日々の中で人の姿を見かけた事は一切ない。
最悪の場合、森の近くには人が一人も居らず頼りになる先人がいない可能性が非常に高い。
そうであれば外部の助力は期待出来ないものと考えて行動する必要がある。
つまり実食し、その結果から判断するしかないのだ
「食ベルしかナいよナ……」

果実、草、キノコ、毒々しい見た目の物から地味な色合いのものまで姿形は千差万別。
今更ながら張り切りすぎて集めた事を若干後悔し始めていた。
それでも実食しなければ食べられるかどうか分からないままである。
取り敢えずは集めたもの全てに毒が入っていると仮定して、致死量にはならないよう微量に千切った欠片を舌先に載せて実験してみるしかないだろう。
そうして始まったドキドキ実食試験、栄えある一番手は山ブドウの様な黄色の果実である。
手に取った果実そのものは小さいが森の中で広い範囲に分布しているため大量に確保しやすい、見た目も一見では毒々しくない色違いの葡萄みたいなものである。
これが食べられるのであれば肉が手に入らない時の非常食として扱い何とか食つなぐ事が出来ると内心で期待している果実である。
鋭く尖った爪先で果実を小さく千切る。
果実の中身は瑞々しく真っ黒や真っ赤といったゲテモノ色ではなく、変な匂いもしない。
それを見て内心の期待は高まる、そして実食の為に舌先に一欠けらを載せようとし――なんとなく横目でチビを見てみた。
――え、お前、それ食べるの？

言葉を話せればそう言っているだろう怪訝そうな顔をしているチビが直ぐ傍にいた。
何というか、その、あんまりな表情をして見ているチビを見て試しにと手に取っている木の実の欠片をチビの鼻先に近づけてみた。
「くるるッ!?」
するとチビは毛を逆立てて驚き、素早く逃げていった。
「……食べタことガないから警戒シテいるだけダ」
口に入れる事に一抹の不安どころか、大きな不安が既に芽生えてしまった。
だがしかし、それでも確認しなければ何も分からず知る事も出来ないぞ！
多分、恐らく、いやきっと食べたことが無いからチビは警戒しているだけだ、そうだ、そうであるに違いないと自分に言い聞かせ自分を鼓舞する。
震えてしまう指先、不安で逃げ出そうとする心を理性で捻じ伏せて指先に摘まんだ木の実の欠片を震える指先から舌先にチョコンと乗せる。
「ヴッ!?」
――不味い、酸っぱい、痛い!!
舌先から襲ってくるのは過去に経験が無い程の危険を感じさせる電気信号、味覚がエラーを引き起こし、痛覚を直接刺激したような痛みが襲ってくる。
熟慮する必要も無く木の実の欠片を舌先から勢い良く吐き飛ばし、同時に手に取った

木の実を全力で遠くにぶん投げる。
そして直ぐに舌先を沢の水で洗い流そうとし――だが行動を起こすには少しばかり遅かったようだった。
「アバばばばぁｂａｂａｂａｂａｂａｂａ?!?!?」
吐き出したのが遅かったのか、即効性の成分が含まれていたのか舌先が痺れ言語が出来ない異常が舌先から全身へ、想定していなかった速さで回っていく。
身体が痺れ最早身動きすら取れない、呼吸は短く浅くなり呼吸困難になり酸素が不足していくに伴って視界は狭まる。
襲い来る痛みに有効な対策を行う事も出来ずに意識は段々と遠のいて行き――

◆

「くる～?」
――いや、困った、どうしよう。
もしチビが言葉を話せるのであればそう呟いていただろう。

目の前でヤバい木の実を食べて泡を吹いている奇妙な生物、それは森で死に掛けた自分を助けた上に何故か襲い掛かってこない奇妙な生物。
それがチビの持つ狼男モドキに対する認識であり、それ以上の物は無い。
それは細かなこと考えられる知性をチビが持ち合わせていない事が原因であり、成り行きとはいえ関りを持った時間の短さもある。
それでも目の前で奇妙な生物が死に掛けているのは獣の本能として分かる。
このまま何もしなければ木の実に含まれた毒が全身に回り近いうちに死んでしまうだろう。
だが奇妙な生物が死んでしまうのはチビにとっても困るのだ。
だからチビは奇妙な生物の身体に触れ、何時もの様に身体の中にあるモノをグルグル回す要領で奇妙な生物の中にあるモノを回そうとした。
そうしてモノが回り始めれば身体が温かくなると同時にお腹が痛みや、苦しみも楽になっていきいずれ収まっていく。
しかしモノを回す事は良い事ばかりではなく、代償として奇妙な疲れと空腹に襲われる問題がある事をチビの未熟な本能は知っていた。
それでもチビは動いた、奇妙な生物を助ける為に自分の物ではないモノを回そうと外部から働きかけた。

「くる？」

だが今まで自分の身体で行っていた様に奇妙な生物の中にあるモノを回そうとしたが回らなかった。

それは言語化するのであれば固いと言えるだろう。

奇妙な生物の中にあるモノが自分のモノとは違って回そうとしても全く動かないのだ。

外部から何度も回そうとして試すが僅かな力を出した程度では回らない程に奇妙な生物のモノはカッチカチに固まっていた。

「く、く、くる――！」

だが今更中断するわけにもいかない、奇妙な生物の時間があまり残されていない事を本能でチビは感じ取っていた。

だがいくら回そうと試みても回り出す事はなく、時間だけが過ぎていくばかりであった。

このままでは奇妙な生物は死んでしまう、それを本能で察したチビはやり方を変えた。

今迄やったことが無い程に自身のモノを回し、それを奇妙な生物の中に送り始める。

それは体系化した知識でも技術でもなく、本能に基づいた行動であった。

自分の中で回るモノの回転に奇妙な生物のモノを巻き込み、奇妙な生物の中にある固いモノを動かそうとした。
結果として見ればチビの行動は正解であった。
奇妙な生物のモノが自分に合わせて回り始め、泡を吹いていた身体の震えが少しずつ収まっていくのをチビは感じた。
また回り始めたのと同時にチビは奇妙な生物の中にあるモノの大きさをなんとなく感じ取った。
驚くべき事に身体の小さい自分よりも奇妙な生物のモノは小さく、それは回るようになった後でも変わらなかった。
「く～～」
だがモノの大きさに関心を持つチビではなく、全力でモノを回したせいかチビには疲労と眠気が襲ってきた。
だが頑張った甲斐もあり奇妙な生物は助かった。
それを本能で理解したチビは奇妙な生物の身体によじ登り居心地がいい場所を見付けると其処で身体を丸めて眠った。
チビにあるのは野生動物に準拠した本能だけである。
それでも森で比較的安全に生存していくために目の前で苦しんでいる奇妙な生物に

死んで貰ったら困る、それだけは本能だけしかないチビにも理解できた。

森の先輩

身体の内側から焼かれるような痛みが駆け巡る。
呼吸をしようにも胸郭は持ち上がらず空気を取り込むことが出来ない。
それは言い表すとすれば水の中に溺れてしまうような感覚だろう。
地上でありながら存在しない水を掻き分けようと両手は宙を泳ぐ。
勿論、掻き分ける水など存在しないから無駄な行動である。
だが、酸素が途絶えかけた頭では碌に思考する事は出来ず、本能に、無意識に従うまま身体を動かしていた。
そして僅かに残った酸素も無駄な行動に費やした結果、視界は黒く染まり意識は深い闇の底に沈んでいき――。
「アー!?!?」
「くるる!?!?」
自分の出した大声で目を覚ました。
先程まで感じていた息苦しさから逃れる様に胸が膨らんで空気を取り込んでいく。
そうして何度目かの呼吸を終えて漸く物事を冷静に考えるだけの余裕が取り戻せた。

「生きテル、死んデなイ?」

自分の身体を触れば其処には確かに熱を持つ毛むくじゃらの身体が存在する。

死んで幽霊になった訳ではない、生きてまだ実体を保っている事を認識すると安堵のため息が自然と口から零れた。

正に九死に一生を得る、と言う他ない。

それを我が身で実感するとは思いもしなかった。

いや、これは単なる言い訳でしかない。

馬鹿だった、どうしようもなく自分が馬鹿だっただけなのだ。

文字通り死に掛け……、いや一回死んだのではないかと錯覚する程の苦しみであった。

だが助かったとはいえ腑に落ちない、正直に言えば毒で苦しんでいる最中に超えてはいけない線を踏み越えてしまったような気もしたのだ。

だが死んではおらず、気が付けば身体の上でチビがぐっすりと眠っていて自分の大声でたたき起こされると自分の巣に戻ってしまった。

分からない事ばかりである、どうして助かったのか、意識がない間に何かが起こったのか。

だが現状でも分かる事が、すべき事が一つだけ分かっている。

「ウラァァァァァァッ!!」

必死こいて集めた木の実、自分を死の淵へ追いやった忌々しい木の実を全力で空へと投げ捨てた。

自分でもちょっと信じられない程の勢いで空へ投げ飛ばされる木の実を見て内心の憤りは少しだけ軽くなった。

だが集めた木の実や草は未だに大量に残っている。

本心としては全てを森の奥深くに向けて投げ捨てたいが、どれも調査していないものだ。

もしかしたら残った全てが投げ捨てた木の実の様に猛毒しかないのかもしれない。

だが、中には食べられる物が存在しているのかもしれない。

そもそもとして飢えから逃れるために食べられるモノを探そうという試みなのだ。

たった一度の失敗で諦めれば遠からず飢えに襲われる、それを避けるのであれば試みを続けるしかないのだ。

だが間違った行動によって死の一歩手前まで逝きかけたのは事実。

ならば同じ失敗を繰り返さない為にも今回、学べた自らの考えの浅さを自覚すると共に教訓をしっかりと胸に刻み込んでいかなくてはならない。

だが此処で大きな問題がある。

食べられる物は知りたいが確証も保証もない中で危険だと疑われる物を口には可能な限り入れたくない。
そんな矛盾する問題に対し短くない時間を考え抜いて導き出した答えが一つ。
それは、先達に教えを乞う事である。
「おねガイしまス、センぱい」
「くるる？」
――お前は何言っているんだ？
と言わんばかりの顔をしているチビだが背に腹は代えられない。
こう見えてもチビは森の生活においては自分より先駆者である。
野生動物として食べられるモノ、食べられないモノが何であるのかを本能と経験で既に知っている可能性が高いのだ。
逆説的に言えば食べられる物を知っていなければ森で生き抜く事は出来ないのだ。
ならばチビの行動から学ぶのが理に適った安全な方法であろう。
そして自分の考えは当たっていた。
森で集めてきた木の実や草をチビに差し出せば食べられないものは小さな手で弾き飛ばし、食べられる物は小さな口で齧りついたのだ。
その光景は自分の考えが間違っていない事の証明であった。

◆

あれから森に出かけるときはチビ共に行動する事で多くの事が分かってきた。
チビは元から雑食性であったのか、森の中で集めてきた様々な木の実や草、キノコ等実に様々なモノを食べていた。
それらを恐る恐る口に運べば毒に苦しむ事は無く、自分でも食べられる食用植物であると判明した。
「ええ……、それ食べルの？」
そしてチビは植物に限らず虫も食べた。
腐った倒木から掘り出したのは丸々と太った芋虫。
うねうねと元気に動く姿は食欲をガンガン削ってくるがチビは気にしていないのか無心で食べていた。
恐らく自分も食べられるとは思うが昆虫食に対する抵抗は大きく、それでも貴重なタンパク質には違いない。

チビも黙々と食べている事から本能で必要な栄養があると分かっているのだろう。
文句を言える立場でもないので、摘まんだ芋虫をなるだけ視界に入れない様に口から胃へ流し込んだ。
その時の食感と味は記憶からなるべく思い出さないようにしている。
そうしてチビの行動を観察した甲斐もあり最低限の食べ物を確保できる様にはなり、満腹には程遠いが餓死することは避けられた。
また最近になってから死骸を見付ける事も滅多に無くなり、早めに食用植物の確保に動き出して正解だったと実感した。
――だが、問題が何一つ無かったというわけではない。
「くるる～～♪」
一つはチビが自分の方が偉いと勘違いして頻繁に身体によじ登ってくるようになった。
加えて最近になって栄養状態が良くなったのか身体が大きく重くなったせいで地味に負担が大きい。
それでも食料探しには欠かせない相棒なので邪見にする事が出来ない。
そのせいでチビは益々調子に乗ってきている――ように感じる。
もう一つは身体から感じる異変。

人間だった頃に感じた体力が余っている時の感覚とは異なる、今迄感じた事の無い感覚。
それが何なのか分からず異変に気が付いても暫くはどうしようもなかった。
だが感覚を持て余してから暫くしてそれは解消された――力の発現と共に。
「まじか……」
目の前に浮かぶのは身の丈を優に超える岩――ではなく指先程度大きさの小石、それが目の前にゆらゆらと浮いていた。
しかも小石を自分が思った様に動かせるのだ！
最初は驚き、その次には興奮した。
規模が小さすぎるが見間違いではない超能力の発現を目の当たりにしたのだ。
この世界で自分だけが超能力（仮称）を使える！
その思い込みが齎す全能感に自分の身体が無意識に震え――、しかしそんな甘っちょろい考えは直ぐに消え失せた。
「でも、森ノ生物に比べレばショぼい……」
森に来てから気にしないようにしてきたが薄々何かおかしいとは思っていた。
その最たるものが遠目に見える森の生き物たちが摩訶不思議な現象を起こしていたことだ。

突然何の前触れもなく不意に突風が吹き荒れ、森の生物の口から炎が吐き出され、地面が何時の間にかぬかるんでいる。

森の生物達の戦いは数える程の回数しか見ていない。

それでも度々どころか常に発生する不可解な現象は一部の個体が持つ特殊な器官を用いた物理現象だと考えていた、そう思い込んでいた。

だが今この瞬間理解した、今迄頑なに特異な物理現象だと思い込んでいた摩訶不思議な現象の正体はコレだと。

この超能力じみた力は森で生きる生物全てが持っている可能性が高く、この力を使って森の生物達は日夜戦っているのだ。

「クソじゃン……」

端的に言ってクソである。

つまり、この異世界は異世界でも魔界とか地獄といったモノに準ずる場所である事が判明してしまった。

そんな新しい発見は何の救いにもならず、非情であり無常な世界に対する怒りと悲しみとその他様々な感情を新たに沸き上がらせる追加情報でしかなかった。

「どうしヨ……」

前触れも無く身体が様変わりした事にも驚いたが、まさか超能力じみた事も出来るよ

うになってしまった。
　これだけでお腹が一杯なのに目の前にある現実は容赦なく私を追い詰めていくのが好きなようである。
　そんな事を寝床としている洞窟の中で自分は考えていた。

　最後に一つ、私、二足歩行から四足歩行になりました。

人生？為せば成る

多くの獣達が生きる森、此処は呪われた森である。
不可視の力、それに侵された森は歪み、捻じれ、多くの生き物を生み出しては互いに喰らい合う蟲毒となっている。
弱肉強食、単純明快なソレに従い多くの獣たちが日々戦い喰らい合う。
だが闇雲に戦うだけの獣ばかりではない。
用心深く身を潜め、漁夫の利を狙うモノ、ただ隠れ生存のだけに特化するモノもいる。
そんな獣達にとって今の時期は食溜めを行う時期だった。
迫りくる冬に備え可能な限り身体に養分を蓄える、それが出来ないモノは死ぬだけだが、それも蟲毒の一側面である
「ギャッ!?」
悲痛な悲鳴を挙げる獣も餌を探して森を彷徨う一匹だった。
だが天に見放されたのか奇襲を受けてしまった。
後脚の関節、其処を砕くように飛んできた礫によって関節は破壊される。
皮膚を突き破って出て来た骨と流れ出る血が地面を赤く染める。

傷口からは止めどなく血が流れる事を獣は認識していながら、しかし獣は何をされたのか理解できなかった。
攻撃されている事は嫌でも分かるがそれだけしか分からない。
だが考える時間は与えられなかった。
再度関節を砕いた攻撃が前足に命中する。
「ギャウッ!?」
悲鳴を挙げるしかなかった。
歩くどころか立つことすらできなくなった獣は前のめりに倒れる。
動く前脚だけで逃げようとするのも最早叶わない。
目の前の茂みが揺れると獣は顔を其方に向け唸りを挙げる。
敵は何処にいる、匂いは、音は、獣の本能は生存する為に五感を研ぎ澄ませ反撃を企てる。
だが茂みから現れたのは小さく、硬く、鋭く、そして速い――、其処で獣の意識は途絶えた。
獣の眼球から入った礫は、目を潰し、視神経を裂き、その奥にある脳を掻き雑ぜた。
即死であった。
獣の身体から力が抜け地面に横たわる。

そして暫くの静寂の後、二匹の獣が現れ死骸を咥え去っていった。

◆

人類の特徴であった物を創り出せる腕、手先の器用さという機能は完全に無くなった。

完全な四足歩行の獣に変わってしまった自分自身を認めたくなかった――が、今さら悩んでも泣きわめいても何も変わらない事は学習してしまったので諦めるしかなかった。

しかし失うばかりではなかく、両手に変わる力――念力（仮称）――を私は手に入れた。

最初の頃の出力は極小さなモノ、小さな小石を浮かしてちょっとだけ投げる程度の力だけしかない非力なものだった。

だが使わないという考えは無かった。

毎日使い続け、力をより深く理解しモノにしようと努めた。

小石を持ち上げ投げ、小石を複数持ち上げ、投げ――地味でショボい訓練をひたすら繰り返す。

チビにも呆れ顔で見られながらの特訓、その甲斐もあって念力の出力は少しずつ上がっていった。

小さな小石から拳大の石に、遠く、速く、投げられるようになり今や念力で腕の代わりを十全に行えるようなった。

そして気付いた、これ狩りに使えるんじゃないの?

本音としては狩りはしたくなかった。

態々危険な相手との命のやり取りなどしたくはない――したくは無いがやらざる得なかった。

理由は食料不足、単純に自分とチビが今までの食料では満たされなくなったからだ。

チビはであった頃よりも身体が大きくなり、私は念力の使用に伴う消費エネルギーの増大。

今迄食べてきた木の実といったものではエネルギーを賄えなくなったのだ。

解決策として食べる量を増やす事も考えたが木の実、キノコといったモノは有限だ。

単純に計算しても縄張り付近のモノは数日で食い尽くしてしまう。

よって狩で肉を食べる必要に迫られ、狩りを実際にやってみれば何とか成功した。

言葉を交わす事は出来ないがチビも現状を危うく思っていたのか、狩には協力的であった。

チビは意外な事に索敵が得意であり、鋭い五感で私では見つけられなかった獲物を見付けてくれた。
そうして見付けた獲物を仕留めるのは私の役割だった。
念力で道中で見つけた鋭い礫を浮かす。
只投げるだけでは避けられる、鋭く早く、生身の腕よりも応用が利く念力の力を活用し礫を回転させる。
最初はゆっくりと回転していた礫、それにさらに力を加えると回転数は次第に上昇、無音だった礫がごく小さな風切り音を奏で始めた。
聞き慣れない音を拾った獲物である獣は周囲を見回し立ち止まと耳を傍立たせる。
――ここだ
礫を獲物に向けて全力の念力で放つ。
弾道を安定させるための回転は期待通りの効果を出し真っ直ぐ獲物に向かい獲物の頭に命中した。
そして獲物の頭部は弾けた。
首からは間欠泉の様に血が噴き出し続けながら残った身体は暫く震えてから地面に倒れた。
――えげつない。

森での弱肉強食のサバイバルが一変した瞬間だった。
色々衝撃的な事があったが、その日は仕留めた獲物を食べるのに夢中になった。
久しぶりの肉と血は五臓六腑に染み渡り自分とチビは暫くぶりの満腹感に包まれた。
それからチビと一緒に念力を使っ狩りを行うようになった。
仕留めた獣は多種多様、蛇や猪、熊に鷲のような獣たちを狩ってはその肉を喰らった。
そんな狩を何度も行えば余裕も出来、少しだけ欲が出てきてしまった。
仕留めた獲物の血をしっかりと抜き、皮を綺麗には剥ぐ。
言葉にすれば簡単だが、実際に行うとなれば大変である。
それでも手を抜くようなことはしない、手間暇をかけたその先に美味しい食事が待っているから頑張れるのだ。
そうして肉の準備が出来たら次は火だ。
沢の水を念力で球体状に浮かし頭上に掲げる。すると森に注ぐ太陽光が水球を通り、レンズの働きで集光される。
後は準備した枯れ木に太陽光を照射し続ければ容易く発火してくれた。
レンズによる太陽光収束、義務教育の有難さを感じることこの上ない。
薪を継ぎ足し種火が大きくなったところで、上に大きな平たい石を乗せる。
そうすれば石製のグリルの完成、後は分厚く大きな肉を乗せて焼くだけ。

そうして出来上がった獣肉ステーキは血抜きをしっかりと行っているため生臭さは僅かに残るものの生肉とは比べ物にならない程美味しくはなる。
味付けに塩が無性に欲しくなるが現状では無い物強請り、其処は我慢するしかないだろう。
「くるる～♪」
チビはチビで火を通した肉の美味さを知ってしまった。
これでは元の食生活には戻れないのは確実、これからも狩の相棒としてキリキリと働いてもらおうではないか。
そう考えてながら肉を更に齧る。
やはり塩気が足りない、この足りない部分をどう誤魔化すか、実に悩み処である。
人生諦めが肝心とはよく言ったもので、どうしようもない現実に対して一人であれこれ悩むのは時間の無駄である。
何より無駄に悩める時間というものがどれだけ貴重な物なのかを知った。
そして多少の余裕が出来た最近は無駄な事を考えることが多くなった。

冬ごもりの準備しよう

森に生える木々が枯れ始め秋入りを感じさせるようになってきた。
緑豊かをを通り越して薄暗い原生林も葉が落ちてくることで日の光が入るようになって明るくなってきた。
そのオマケで冷たい風も吹くようになって肌寒さをヒシヒシと感じるようになってしまったが。
自前の毛皮である程度の雨風は凌げるとはいえ寒い物は寒い。
それが嫌で何とか暖を取ろうとすれば火を起こすしかない。
しかし火は加減が利かず熱くなりすぎる事もあるし夜寝ている間に起こした火は朝を迎える前に消えてしまう。
正直言って不便なのだ。
寝ている間まで暖かく、熱すぎない、そんな便利な電気毛布みたいな物は森には無かった。
だから作ってみた。
「くるる～♪（あったか～い♪）」

チビが懐に抱え込んで暖を取っているのは赤みを帯びた小石、それから微弱な熱が放出されチビの身体を温めていた。

それは試しで作ってみた熱を発する石、これは念力で消費していたエネルギーを別の力に変換して石に込めた単純なものだ。

今や手足の様に使っている念力だが、使うたびにエネルギーを消費して、それが空腹という形で表れていた。

そのエネルギーを念力以外の力に変換できるのでないか、その事に気が付けたのは狩りで戦ってきた獣達を身近で観察する機会に恵まれたからだ。

風を巻き起こし、炎を吐き出し、地面から杭を出し、身体の輪郭をぼやけさせる、今迄狩で戦ってきた獣達は、そのどれもが得意な力を持っていた。

そして戦っていく中で何となく感じるようになった、これらの力と自分の扱う念力、元は同じものではないかと。

確証は無かった、それでも物は試しと試行錯誤してみれば出来るようになった。

無論、本家本元には著しく劣る。

炎を出そうと思えば出てくるのは小さな火であったり、地面から鋭い棘を出そうとしても出てくるのは小さな土の小山でしかなかった。

変換効率で言えば1%あるかないかだろう。

お試しで作った熱を発する石も熱に変換した力が石からちょろちょろと漏れているだけでやった事は石に力を入れる事だけ。
込めた力も大半が霧散して石に入ってたのはその一部でしかない。
それでも自分の持つ力の可能性が広がったのは喜ばしい事だった。
「くるる～？（なにしてるの～？）」
「グルル（実験だ）」
宙に浮かせた小石をどうしようか悩んでいるとチビが興味深そうに見つめて来た。
思えばチビとの付き合いも長くなって今では何を言っているのか何となく分かるようになってきた。
言葉が通じている訳ではなく仕草や鳴き声を通してのぼんやりとしたものであるが。
それでも今では時に軽くじゃれ合い、寒い夜には一緒に一塊になって寝る仲だ。
そんなチビも出会った頃とは大きく変わっていた。
荒てボサボサだったくすんだ毛並みも艶やかで綺麗になった。
小さく骨と皮だけの様な痩せ細った身体は大きくなり太い骨と発達した筋肉を内包した身体に育った。
やはり木の実や草だけでは成長に限界があったのだろう。
やはり肉はいいものだ、木の実や草とは比べ物にならないカロリーとタンパク質を豊

富に含んでいる。
肉を食べるようになって栄養状態が目に見えて改善され成長する事が出来るようになった。
まあ今はそんなことよりも小石で何をするかだ。
視線の先には宙に浮いた小石、さてこれで何をするべきか。
事故はなるべく起こしたくないから何かが原因で暴発しても小石程度なら自前の毛皮で防ぐ事は可能だ。
それ以前に小石にはこれといって特徴も何もなく、素材としては貴重ではなくありふれたものだ。
此処は失敗を織り込んで数をこなしていく事が重要だろう。
「くる、くる～？（ねぇ、ねぇ、なにしてるの～？）」
「グ、グル（こら、近寄るな、危ない）」
身体が成長すると共に生まれ持った強い好奇心のせいかチビは私が何かする度にすり寄ってくる。
危ないと何度も伝えてはいるがまるで聞き入れる気配がしない――まあ、鳴き声でそこまでの深い意思疎通が出来ない事も一因だが。
一回厳しく吠えたらいいのだろうか、だがそれで臍を曲げられてしまっても困る。

どうすればいいのだろうか。
小石を宙に浮かべながらチビとじゃれ合う、小さな脚が身体に食い込んで地味に痛い。
じゃれ合っているとふとした時に、これからの事を考えてしまう。
今の状態はなんとも不明瞭であり、先行きが明るいわけは無く、むしろ五里霧中と言えるだろう。
それに最近は寒くなってきていてもう暫くすれば雪でも降りそうな気配がある――そもそもこの世界に四季があるのかさえ知らないのだが。
それでも仮に雪でも降るくらい寒くなってしまえばどうなるだろう。
今日くらいの寒さであれば自前の毛皮で耐えられる、だがそれよりも気温より下がってしまえば困ってしまうだろう。
何か身体を温める方法を開発するべきか、それに加えて冬に備えて食料を備蓄するべきなのだろうか。
考えることは沢山あって、出来ることは限られる、分からないことだらけで不安が無くなることは無い、なんとも言い難い状態だ。
それでもじゃれ合うチビを見ていれば何とかなるのではないかと考えてしまう。
何より悩んで答えが出ない問題なら悩むだけ無駄なのだ、その時はその時、将来の事

は未来の自分にポイと投げ捨ててしまえ。
それがこの世界で生きていくコツなのだ。
そうして悩むのは辞めたなら最優先する事一つ。
目の前で生意気盛りのチビを臍を曲げない程度に懲らしめる事だ。

味の決め手はこれでしょ

照り付ける太陽、海風が運んでくる爽やかな潮の香……。なんて事もなく曇り半分、晴れ半分の微妙な転機に、風が運んでくるのは生臭い潮の香だった。

それでも目の前に広がる海の広大さはこの世界でも変わらず、青々した海水が時折日光を反射しては煌めいている。

さて、何故私が海に来ているかといえばチビの気紛れの賜物だった。

最近は何位でも興味を示すようになったチビはある日、拠点近くを流れる沢の水が何処に行くのか気になった。

それで試しにと沢の流れを追って見れば終点に辿り着く気配は一向にない。

それで諦めてくれればよかったのだが、好奇心を抑える事が出来なかったチビは一大決心をして沢下りを敢行する事にした……デカい相棒を巻き込んで。

いや、興味はあったけど拠点を離れるのが嫌でしてね。

最近になってようやくモノになった地形操作のを駆使して元々の寝床を改良、改築したから住みやすくなって離れたくないんですよ。

そんな引きこもり思考の相棒に対してチビの取った行動は単純でごねにごねた。

キャンキャンと吠えるわ、身体に噛み付いて引っ張ってくるわ、背中によじ登ってはゴロゴロするわ、大変でした。

それが数日で収まることはなく、チビに根負けして付き合うことになった。

そうして森を超え、岩場を超えた先には青々とした海が広がっていた。

「くるる～！（なにこれ～！）」

「グルル！（余り離れるなよ！）」

初めて海を見たチビは大はしゃぎ、いきなり走り出しては打ち寄せる波を興味津々に観察したり砂浜を掘り返している。

流石に興味を引かれつつも初めて見る海には恐怖があるのか近付くだけで波が来れば走って逃げだしていた。

あまり遠くに行かないように声は掛けたが、警戒心が残っているのであれば心配は無い。

昔はともあれ今や狩の相棒なのだ、危機管理能力もそれなりにあるで過剰な心配することは無いだろう。

そうしてチビを視界の片隅に収めつつ砂浜に対して地形操作を行使する。

砂を動かし、固め、大きな窪みを作り、合わせて土器擬きを作る。

そうして原料は砂だがそれなりの竈と鍋が出来上がった。

最期に砂浜に散らばっている流木を念力で拾い集め竈に隙間なく入れる。

「フ～」

喉に力を集め吐き出すと口からは火が出る。

戦闘には役に立ちそうにない弱弱しい火だが、太陽が出ていない曇りの日や雨の日でも火種に困ることが無くなったので重宝している。

流木に火を吹きかけ燃え移れば完了、後は鍋に念力で汲み上げた海水を入れていく。

ぐつぐつと海水が煮えたぎり水分が蒸発した減ったら追加で海水を注ぐ。それを何度が繰り返すと後には白い粉がこびり付いている。

それを一摘まみ掬って舌に載せ味わう。

――しょっぱい。

味覚に感じるのは過去に食べ慣れた塩と比べると味が劣るが、間違いなく塩だった。

塩、塩分は森では摂取しずらい栄養であり貴重である。

今回の遠征はチビの思い付きで始まったものだが、途中で飽きて引き返すものとばかり思っていた。

海まで行ければ塩を手に入れたいな～、とは考えていたが海まで辿り着いた以上可能な限り塩は入手したい。

そうと決めればやることは一つ、地形操作を全力で行使して竈と鍋を追加で作り出

す。
原始的な製法だが今後の食事で使う事も考えてそれなりの量が欲しい。
幸いにも燃料となる流木や小枝は砂浜に大量にあった。
「くるー！」
だが塩作りに挑む直前でチビからの鳴き声が届く。
声の調子からして命の危険は無さそうだが、初めての場所であるから最悪の可能性はある。
四肢に力を籠め地面を蹴る。
砂が舞い上がり作ったばかりの塩が地面に零れるが、それを無視して急いで声のした方向に駆け出す。
砂浜を駆け抜けその先の岩礁チビはいた。
無傷で傷らしい傷は追っておらず、五体満足のようだが何かに怯えているのか岩の影に隠れていた。
「くる～……」
怯えていたチビだが私に気が付くと駆け寄ってくる。
脚の間に挟まってくるがチビが怯えてしまう原因が分からなかった。
それらしいもの探し出そうと見回すが見つからない、視界の先にあるのは岩礁だけ

だ。
だが暫く待つと原因が見つかった。
視線の先にある一際大きな岩礁、その上に海鳥?が降り立つと羽繕いをする。
すると何処からともなく数本の糸、いや触手か……、それが鳥に静かに忍び寄る。
それに鳥が気付いて逃げ出すが、それよりも早く触手が鳥を絡め捕った。
そうして岩礁の一部が動いて穴が出来るとその中に触手と共に鳥は消えた。
――うわ、怖!
岩に擬態した、何だろうか、貝?触手があるから蛸か。
なんでもいいがあの岩礁は生き物で擬態している事は確か、オマケにデカい上に肉食だ。
獲物を捕獲した触手は素早く、隠密性に優れている。
そして相手は積極的に動く種類ではなく、基本的な戦略は待ち構えてからの不意打ちだろう。
触手で絡め捕って中に引きずり込めば後は質量に任せて圧し潰す、なかなか理にかなった戦略と言える
一言で言えば何とも面倒な相手である。
幸いにもチビが気付いてくれたから不意打ちを喰らう事はなかったが、知らずに不意

打ちを喰らえば危なかっただろう。
一見安全そうに見える場所でも森と同じように海にも危険が満ちている事は分かった。
その上でアレをどうするべきか、近付かなければ危険は無いが出来れば仕留めたい。
なぜなら今後も海辺を利用するのは確定事項であり、その為にも目に見える脅威は取り除いて安全を確保しておきたい。
そうして色々と考えているとお腹が鳴った。
すると真面目な事を考えていた頭は余計な方向に思考がそれ始めていく。
そういえば海産物を食べてないな～とか、海に来たから日本人としては海産物を食べねばならないという謎の使命感が脈絡も無く湧き起ったりもすれば、視線の先には擬態した蛸みたいな触手を持った貝みたいなものがあって触手はコリコリとしておいしそうだったなとか。
そして閃いた。
――そうだ、壺焼きにしよう
何もつながりも無かった思考は悪魔合体を起こした。
そして理性も反対する事もなく思い付きを可決した。
そうと決まればやることは沢山ある。

地面に獲物が収まる大きな穴、逃げ出せないような深さまで掘ると下には流木を敷き詰め、通気用の穴も別途に開けて燃料である流木をありったけ集める。
これで準備は出来た、後は小山のごとき獲物を持ち上げて穴に落とすだけだ。
「グルルルルッ！」
念力を発動、擬態した岩ごと持ち上げようとするが想像していた以上に重い！
それでも持ち上げられない重さではない。
今迄で経験したことが無い念力の行使、頭に血が上るのを感じつつも獲物を宙に浮かせる。
獲物も自分の身に起きている異常事態に気付いたのか、岩礁の彼方此方が開いては幾つもの触手が飛び出してきた。
だがうねうねと蠢く触手が届く範囲には私はおらず、触手は何もない宙で蠢くだけだった。
すると今度は岩礁の底から移動用なのか今までの触手とは違うものが飛び出してきた。
捕食用のモノとは違い太く短く、だが力強さを感じられる触手、それも念力で宙に浮いている以上何も出来ずに触手は空しく宙を掻くだけだ。
「グルウァッ！」

そうして全身から触手を出してうねうねとしている獲物を掘った穴にぶち込む。
すると丁度いいサイズだったのか逃げ出そうとするも身動きは取れず、穴に深く入り込んだ事で触手も身動きが取れなくなった。
――さぁ、壺焼きの開始だ
喉を嬉しそうに鳴らす私の傍でチビが信じられないモノを見るような目つきで見ていた事には気が付かない振りをする。

新発見

半日かけてじっくりと焼いた獲物の正体は貝だった。

日が真上に登った頃から抵抗が一切なくなった貝だが死んだふりとかをされたら嫌なので念のため日が暮れるまで壺焼きを続けた。

そうして完全に焼き上がったと確信してから岩礁に擬態していた殻の部分を割って中を覗き込むと程よく茹で上がった中身があった。

元が大きい分中身もたっぷりとあり中でも茹で上がった触手はまるで蛸の足のように赤く茹で上がっていた。

触手は一口サイズに切って口に入れればコリコリと噛み応えがあり美味しいもので、触手以外の貝本体も内臓と思われる部分を取り除けば味わい深くクリーミーなものであった。

巨大貝は見た目にそぐわない美味しさで手持ちの調味料が塩だけでも美味しく食べる事が出来た。

だからこそ手持ちの調味料の貧相さが悲しかった。

塩だけでも十分に美味しいが、せめて醤油が欲しい、加えてバターあれば最高の食事

になっただろうと無い物ねだりをしてしまう。
それでもこの世界での初めての海産物は美味しく食べる事が出来た。
無論チビも食べたが最初は一口も手を付けようとしなかった。
悍ましい怪物を食べる事が嫌なのか食事には手を付けず、此方を恨めし気ににらむだけだった。
無論チビの気持ちが理解できない訳でもない、初めて食べる海産物に警戒をしてしまうのはしょうがない。
だが代わりの食材は無く空きっ腹に勝てなかったチビは恐る恐る触手を齧った。
味付けで塩を使っているのが効いたのかその後は我先にと食べた。
これでチビも海産物の美味しさを分かってくれただろう。
その日の残りは塩作りに専念して夜は浜辺で過ごした
翌日になってチビは拠点に帰ろうとしたが今度は私がチビを連れ回す事にした。
目的は塩作りと海産物に舌鼓を打つ……ではなく今いる場所が何処なのかを知るためだ。
その結果として分かった事が二つあった。
一つは此処が島だという事実。
海辺に沿って休みながら歩いて行くと二日目で元の砂浜に戻って来た。

道中では大きな問題は特になく、砂浜と時々岩礁があるくらいの道のりだった。
それを考慮しても今いる場所は島で、面積もそこまで巨大なものではない事が分かった。
二つ目は島の中心にある森が島の面積以上に広い事、これが一番の問題だった。
短くない時間を森で過ごしてきたが考えられる島の面積以上の空間が森に広がっている事は間違いがない。
結論から言えば空間が狂っているか拡張されていると考えるのが妥当だろう。
何せ不思議な力を持つ獣達が跋扈する森である、森自体に不思議な力があったとても驚くような事じゃない。
そうして知りたがっていた事を知れたのだが、その後に何かをするということは無かった。
もし、この事実を知ったのがこの世界に来た初めの頃であれば何かしら行動を起こしていたかもしれない。
しかし今となっては獣の姿になれ、その反面人であった記憶が薄らいでいくのを感じることが多くなった。
寧ろ、人であったという記憶が作られたものではないかと考える時すらある。
――これは胡蝶の夢か否か。

結局の処自分次第でいかようにもなってしまう認識ではあるが、思考が冴え渡る今は実にいろいろな事を考えてしまう。
それは森で常に聞こえていた声が聞こえなくなったことも関係があるのだろう。
森から離れていく内に次第に小さくなっていった声であるが海に出たことで声は一切聞こえなくなった。
そうして聞こえなくなった今、森で聞こえてきた声にはこちらの精神に対して干渉しようとする意図があったと理解した。
……だからといって特別な事をするつもりは全くないが。
やるとしても森に帰っても声が聞こえないよう、干渉されない様に防壁みたいなものを構築する位しかない。
それか森での拠点を捨てて此処に新たな拠点を築くのも一つだろう。
「くる～（もっとちょうだい）」
日が暮れ始め、夕陽が海岸線の向こうに消えてしまう風景を一望できる砂浜。
ガチンコ漁で捕まえた魚を焚火で焼いているとチビがお代わりを要求する。
程よく塩を振って焼き上がった魚を差し出せばチビは魚の頭から被り付いた。
ポリポリと骨を噛み砕きながら食べるチビを見ていると物事を深刻に考えるのは無駄ではないかと思ってしまう。

あるがままを受け入れ、その日の気分に従って生きるチビの生き様は少しだけ眩しく感じてしまう。

だからといってチビのように生きるのは私には無理だろう。

そんなこと考えながら私も焼き上がった魚を食べる。

ポリポリと魚の骨を砕き、丁度良い塩加減に舌鼓を打つ。

チビも海産物が気に入ったようだから今後の備えて干物作りに挑戦してみようかな。

異物であるが故に

雪が降っている。
曇天の空からは白い雪が降り続き、森を白く塗り替えてしまった。
生い茂った草木も多くは枯れ果て、その身を雪の白さが死に化粧の様に彩る。
それでも森の営みには変化は無く、雪で作った白面に唯一の彩として紅い血が添えられていく。
強者が弱者を殺し喰らい、寒気に耐えられないモノは容赦なく死んでいき雪の白さに埋もれていく。
そんな森の奥底には一軒の家屋があった。
塀を備え、敷地面積も広い家屋はどちらかと言えば小さいながらも屋敷と呼べる規模である。
しかし長年手入れをされていないのか塀は崩れ、屋敷も廃墟と化してしまっている。
無論そのような場所に住む人はおらず、廃墟に居るのは虫と人ならざる者だけだ。
人ならざる者、巷では魔物と呼ばれるモノ。
その姿形は千差万別であり獣の姿をしたモノ、蟲の形をしたモノ、実に多彩であり、そ

のどれもがその身の内に秘めた力、妖力を用いて様々な現象を引き起こす。
炎であり、風であり、水であり、姿形と同じく持つ力も様々なモノがった。
そして廃墟に住み着くモノも魔物であった。
だがソレは普通の魔物ではなかった。
廃墟の奥深くにある一室、光も差さな暗闇にソレはいた。
人の死体、生前に羽織っていた着物は朽ちかけ、其処から除く手足は痩せこけ身体は土気色に変色している。
眼球は腐り落ち、虚ろな眼窩は空っぽである。
だが一見して即身仏のような死体は未だに動いていた。
暗闇が支配する一室で祈り続け言霊、呪言を幾年月を経ても繰り返し吐き続けている。
ソレは人が魔物に堕ちた成れの果て。
その朽ちた身体を動かすのは年月を経ても消える事の無い憎しみ、憎悪を原動力として動き続けている。
だが長い、気の遠くなるほどの長い年月を経て憎しみ以外のものは壊れて消えた。
今やソレに思考する知性は僅かしか残っていない、昔の魔物に堕ちる前の思考を繰り返すだけの残骸でしかなかった。

だが魔物に堕ちてより辞めることが無かった祈りを中断せざる得ない事態が起こった。

森に張り巡らせた呪い、それに自我を完全に圧し潰された魔物を即身仏は支配し操り、その視界を共有する事が出来る。

その支配した魔物の視線の先には二匹の魔物がいる。

大きいモノと小さいモノ、そのどれもがその身に強大な妖力を宿していた。

中でも大きい魔物は質も量も上質であった。

それだけであれば何も問題視する事もなく上質な贄が生まれた事に喜び支配しようとしただろう。

だがそれは出来なかった。

呪言と共に二匹の精神を縛り付けようとするも弾かれてしまう、それは異常な出来事であった。

森を支配下に置いてから幾年月、互いに喰らい合うように理を捻じ曲げ蟲毒として機能するように森を作り変えて来た。

即身仏にとって森は餌場、自らの懐で育てている特別な魔物の為の餌でしかない。

そして生き残った強い妖力を持つ魔物を支配下に置いては贄にし続けて来た。

だが魔物は未だに完全体には程遠い。

身体は不完全であり、身に秘める妖力もまだ不十分、悲願を叶えるには力不足である。
だがそれも残すところ十年、今迄通り贄を与え続ければ完全体になるのは間違いない。
そうして漸く悲願を達成する事が出来るだろう
だからこそ計画に支障をもたらすであろう異物を放っておく事は出来ない。
件の二匹の魔物の強さは今や上位に位置する、森に生きる凡百の魔物では喰われ糧なるしかない。
ならばどうする、生まれたばかりの小さく弱小な存在の時に消していればよかったのか。
それは出来なかっただろう、何よりこの二匹の特異な点は妖力なのではなく自我そのものにある。
島を覆う呪言による狂化も受け付けず、理性を持って生きる魔物は島では二匹だけ。
そしてこれ以上妖力が高まれば島を支配することも可能になるだろう。
それだけは何としても阻止しなければならない。
即身仏は僅かに残る知性を動員して策を練る。
時間はそれ程掛からなかった、堕ちる前に猛威を振るった悪辣な思考が従い導き出した策は二匹の間に確かに感じられる繋がりを利用するもの。

だが二匹の魔物が内包する妖力は高まり島の魔物の上位に比肩しうるまでに育ってしまった。
そうなると仕留めるには島の魔物を喉ける必要がある。
手痛い出費ではあるが時間は即身仏の味方、時間を置けば贄を喰らう事は出来る。
何より二匹の魔物の妖力は上質なもの、喰らう事が出来れば損失を上回る力を得られるのは間違いない。
そして狂っていない理性を宿した魔物、厄介ではあるソレらが齎すあろう苦痛に泣き叫ぶ声と悲鳴は長らく感じていなかった仄暗い喜びを即身仏にもたらすであろう。
そのような結末を想像できた即身仏は崩れ朽ちかけた顔を歪ませて嗤う。
無論それだけでは満足には程遠く、満たされるものではないが余興としては十分に楽しめる物にはなるだろう。
そうして即身仏は島での祈りを再開する。
全ては堕ちる前より願っている悲願、復讐の為。
己を認めず、恐れ、否定し、拒絶し、遠ざけだ者どもへ復讐する為に。

◆

久しぶりの森はやはり居心地が悪かった。
足を踏み入れた時から再び囁き声が聞こえ始め薄らと身体に何かが纏いつく様な感じに襲われた。
身体に纏わりつくのは薄らと見える黒い靄、まるで納豆の様な粘り気で纏わりついてくるのがなんとも不快だ。
今まで見ることがないし叶わなかった靄、それは海辺で暮らし始める事で漸く自覚できたものだった。
そして自覚が出来て尚且つ不快であれば対策をしたい、そう考えて生み出したものがあった。
喉に力を溜め吐き出す、出てくるのは赤々と燃える火ではなく白色の火。
それは黒い靄に触れると燃え移り火勢を保ったまま靄を燃や尽くし消し去った。
この火は普通のものでは無く、熱も無ければ枯れ木などの可燃物に燃え移る事もない不思議な火だ。
実態としては靄を分解して霧散させる機能を持つ吐息、服の汚れを落とす石鹸の様なものをイメージして生み出した。
それが何で白い火の様に見えるのかは自分でもよく分からない。
それでも便利なので森にいる間は何度も使っている。

「くる～」

チビも纏わりつく黒い靄は我慢するが耐え切れなくなったら白い火を要求する様になった。

白い火に包まれたチビは一見して丸焼けになった様に見えるが火傷などは負っていない。

そんな姿も何回も見るうちに慣れてしまい、今では逆に目立って見つけやすくなったと考える様になった。

何はともあれ森は不快なので海に早く帰りたい。

では何故森に入ったのかといえば拠点に溜め込んでいた食糧と木の実や植物で作ったスパイスを回収するためだ。

島にも雪が降り始め、本格的な冬が来たと思い至ると溜めてある食糧に不安を覚えるようになったからだ。

この冬が何時迄続くのか分からず日々減っていく食糧を見るたびに不安が募っていく。

そんな中で森の拠点に残していた食糧を思い出し回収に向かい出した。

だか久しぶりに帰ってきた森は何かが違っていた。

元々静かな森で冬であったがその事を加味しても静かすぎた。

森の拠点に向けて一歩踏み出す度に何とも言えない違和感が少しずつ積み重なっていく。
そして森の拠点まであと少しと言うところで異変がおこった。
森にしては珍しく開けた場所、そこの中心に差し掛かったところで周りを囲む様に獣達が現れた。
その数は十を超え、警戒している間にも増え続けた。
その目は濁っており、口から際限なく唾液を垂れ流す様は正気を保っているとは言えない。
端的に言って狂っていると言えるだろう。
そして獣達は徒党を組んで襲い掛かってきた。
確かな連携があったわけではない、まとまりも何にもなくただ闇雲の襲い掛かってくるだけだ。
「くるっ?!」
それでも物量は明確な脅威であった。
加えて獣達には連携がなくとも戦術はあった。
戦いの最中にチビと分断され包囲する様に動いてきた。
合流しようにも何頭もの獣が間に立ち塞がり、突破しようとすれば背後から襲いか

かってくる。
嫌らしい戦術であり連携も取れていたら不覚を取ったかもしれない、だか実際には連携も何も無く闇雲に襲ってくるだけ。
そうであれば対処の仕様が既にあった。
突出してきた獣、その眼窩に礫を撃ち込み速殺する。
死体に足を取られ勢いが削がれた獣を一匹ずつ、片っ端から殺す。
脚で踏み潰し、礫で脳を射抜き、念力で頸骨を圧し折った。
時間を掛けずに素早く丁寧に殺し尽くす、その後には凄惨な現場だけが残っていた。
だか其処にチビはいなかった。
夥しい血が流れ出る屠殺場にあって嗅ぎ慣れたチビの匂いは森の奥深くに、たこれ見よがしにチビの血痕も続いていた。
そして何時も聞えて来た囁き声が今回は違っていた。
――片割れは奥に
意味深に囁く声は不快であった、だか言わんとする事は理解できた、
その声は海辺の拠点に帰る間も聞こえ続けた。
だか其れらを無視して森から出て、拠点に帰った。
そして冬に備えて保管していた乾燥したキノコ、干物、水といった食料を可能な限り

口に詰め込んで減った力の回復に充てる。
そうして食べ終われば拠点の奥深く進む。
そこには森での食糧回収に邪魔になると判断して持って行かずにいた武装が幾つもある。
――其れら全てを身に纏う。
全ての準備が終われば拠点から出て走り出す。
これは喧嘩か、弱肉強食の生存闘争か、どれも違う。
これは戦争だ、明確な殺意の元、必ず殺し尽くす様に考えられたものだ。
その上で考える、自分は何をすべきか。
答えは単純明快、チビを救出するだけ。
ついでに森の奥にいるであろう下手人をぶっ殺す。
一方的に仕掛けられ大切な相棒を攫われた、これ以上の理由は必要ない。

お見送り

駆ける、駆ける、道なき道を進み、踏み越える。
道の先に立ちふさがる獣が何頭いようが止まることは無い
潰し、射抜き、圧し折り、蹂躙していく。
囲まれた時とは比べ物にならない殲滅速度、武装を整えた今、凡百の畜生どもに足を止める事は出来ない。
踏みしめた足跡の上には血と肉片が降り注ぎ、雪の白さを塗りつぶすような紅い道が出来ていた。
その足が止まったのは森の中心、目的地に辿り着いたから。
そして其処は一目で異常でである事が伺える奇妙な場所だった
森の中心にあったの廃墟、明らかに人の手で作り上げた家屋であり規模も大きい。
それでも長い間手入れをされていなかったのか家屋の壁は崩れ、庭園は荒れ果て、塀は全て崩れ落ちていた。
そんな廃墟の中心、其処にチビはいた。
何らかの力で宙に浮かされ黒い靄に包まれている。

遠目からでもその表情に苦痛が浮かんでいるのが見て取れる。
その傍らには一人の人間がいた。
いや、あれは人間と呼べるものなのか。
其の身体は既に干乾び、まだ離れているのにもかかわらず腐臭が漂ってくる。
着物の様な物を纏うも生地は蟲に食われ、劣化し元の色が何であるか分からない。
その姿を見た時に記憶の中から思い当たるものが一つあった
――即身仏
昔の日本民間信仰において、死して仏になることを目指した人がなるもの。
生死の境を超え、衆生救済を目的として永遠の瞑想を行う、であったろうか。
だが視線の先に立つモノは知識としてある即身仏とは何もかも違う。
土気色に変色した死体は普通は動かない、それが常識だ。
だが目の前ソレは動き、その身からはこれでもかと黒い靄が漏れ出ている。
どう見ても人の世の安寧を祈るものとは対極の存在、人の世に災いを齎そうとする化け物にしか見えない。
その即身仏はぎこちなく身体を動かし此方を指さす。
すると頭には森で聞こえたモノよりはっきりとした声が聞こえた。
――畜生にしては賢いな、コレの命が惜しければ何もするな。

すると即身仏の後ろ、後方に伸びる影から何かが這い出てくる。
それは巨大な蛇だ、長い体躯は鱗に覆われ口からは細長い舌がチロチロと見えている。
だがその身体は所々腐っている。
鱗が剥げた箇所があれば、片方の眼球は白く濁り、片方は眼が無かった。
――大人しく喰われろ。
蛇が口を開ける。
目の前の獲物が余程美味しそうなのか腐りかけた口から涎を垂れ流しながら蛇はゆっくりとこちらに向かってくる。
――ふざけんじゃねえぞ。
準備は済ませて来た、身体に纏わり付かせていた礫を全て展開する。
その中でも特に紅く輝く礫、蛇と即身仏に向けて発射する。
蛇は何の妨害も無く進み大口を開けた上顎に衝突、その直後爆発を起こして三分の一を消し飛ばす。
だが即身仏へ発射した礫の軌道はあらぬ方向に逸れると、後ろにある地面を盛大に吹き飛ばした。
突然の出来事に理解が追い付かないのか即身仏は動きを止める――発射と同時に駆

け出した身体で体当たりを行い即身仏を吹き飛ばす。
ぶつかってみた感触として何かが即身仏との間にある。
まるで膜のようなそれは体当たりの衝撃の大部分を吸収して本体を守った。
それでも敵を吹き飛ばす事は出来た。
宙に浮いているチビに駆け寄る。
身体を覆う黒い靄に向けて白い火を吹きかける。
頑固な汚れを落とす、そんなイメージで作り出した火は靄に燃え移ると順次分解していく。
「く、く、くる…」
「グル」
目覚めの悪そうなチビだが靄以外には致命的なモノは追ってないようだった。
だが体力や力はかなり消耗したらしく何時もの元気は見られない。
自力での移動は難しいと判断して背中に載せる。
するとチビは落ちないように自分の身体に私の毛を巻き付けて固定するとそのまま目を閉じて眠り出した。
「!!」
悲鳴とは違う何かが空気を震わせる、金属が軋む時に出るような音が辺りに響き渡

る。
音の発生源を見れば其処には即身仏と蛇がいた、だが其の姿は酷い有様になっている。
身に纏っていた着物の様な物はボロ雑巾と化し、左右の腕はあらぬ方向に曲がり、陥没した頭蓋骨からは黒い血の様な物が流れ出ている。
蛇も同様に身なりは汚れ、何より頭部の三分の一が消し飛んだお陰で伽藍洞の頭蓋骨からは黒い液体と黒い靄がこれでもかと溢れ出していた。
だがその姿も次第に元通りになろうとしていた。
黒い靄が負傷した部分に集まれば腕は正常な状態へ、吹き飛ばされた頭部が再生していく。
そうして元通りの姿に戻った即身仏が此方を指さす。
すると頭の中に声が響いて聞こえるが内容はまとまりがなく、唯ひたすらに何かを喚いているで内容は分からない。
だが発言が何であれコレは不快であり、何よりも煩い。
喧しく雑音を生み出す即身仏、その腕を斬り飛ばす。
身体を覆う膜を斬り裂いて首を斬る筈であったが、途中で膜を強めたせいかそれは出来なかった。

腕の断面からは血ではない黒々とした液体が流れ続けている。
再び腕を再生するため靄が断面に集まっていく、それと同時に即身仏から出る靄が減った。
立て続けに傷を負ったことが驚きなのか、頭に響く声は小さく弱弱しくなった。
死体であるから表情を読み取る事は出来ないが如何やら驚いている様、それでも傷が治れば再び怒りの感情をぶつけてくる。
間違いなく怒り狂っているのだろう。
此処まで手間を掛けてくる様な相手だ、思い通りに物事が進まない現実を受け入れられずに喚き散らすしかないのだろう。
それに今回の事を考えても生前からしても悪行を重ねてきたような相手に違いない。
この場から逃げ出せたとしても必ず逆恨みで復讐してきそう。
そして島から出られない以上何時かはまた出会う。
だから此処で仕留めた方がいい、この場で仕留めなければ後が怖い。
――武装展開
念力の使用を前提とした武装、その全てを制御下に置きその刃を即身仏と大蛇に向ける。
身体を覆えるほどの光沢を持つ赤褐色の大剣、土に熱を加え圧縮して作り出した半分

ガラス化した大剣、計六振り。
大剣と比べれば小さくとも抜群の操作性を持つ蒼く輝く薄刃、巨大貝の貝殻から削り出した磨き上げた薄刃、計十四振り。
そして愛用している礫、その中でもとびきり鮮やかな赤色を帯びた礫が溜め込んだ力が解放されるのを待ちわびる、残弾五十。
現時点で操作可能、投入可能なすべて武装を展開する。
「!?」
ガラスと化した大剣、生物を容易く斬り裂く薄刃、破裂を待ちわびる赤色の礫を見る即身仏が驚愕している様だが気に掛ける価値はない。
――死にぞこない共を黄泉へ送って差し上げようか。

立つ鳥後を……

何が起こっている、何を相手にしているんだ。
己は魔物に堕ちた、その代わりとして生前を超える力を手に入れた。
この島に流され、絶望に暮れるも地脈を見付け、それを掌握することで此処まで強くなった。
使役している蛇は己が捕縛される際の戦いで弱り、消滅の危機に瀕したが地脈から流れる膨大な霊力を与える事で持ちこたえた。
その身は単身で国を傾けさせる事が出来る程強大なのだ。
「■■■■■■■■ッ!?」
己が育ていた大蛇が声なき叫びを挙げる。
完全体ではないと言えその力は強大、かつて一晩で十を超える村を滅ぼし、百の人を喰らうと恐れられた魔物。
それを己は使役し、その暴力を振るってきた。
使役者である己が魔道に堕ち、引き摺られるように弱体化していても弱くは無い。
加えて此処まで妖力を回復させたのだ、最盛期とはいかないまでも、それに後一歩で

届く力は持っている筈なのだ。
術を行使する時が無い、戦運びを考える余裕さえ与えられない。
身に迫る大剣を蛇の尾で防ぐ、硬質な物が衝突して甲高い音を立てる。
迫る一撃は大剣を防ぎ、幾つか鱗を割るだけに留まった。
続いて二撃目が迫る。
防いだとはいえ安心は出来ない、妖力を蛇に与え膜を張る
これで無傷で耐えられるはずだ。
だが二撃目が重なって斬り込んできたことで全てが無駄に終わる。
宙に浮く大剣の内三振りが尾に、同時に、同一個所に打ち込まれる。
膜を容易く破り、鱗を砕き、肉を断ち切り、骨を粉砕した。
蛇が鳴く、痛みに、苦痛に耐えかねて。
だが相手は待ってはくれない。
乱雑に食い込んだ大剣を抜き取る、そして再び三振り同時に襲い掛かる。
真面に受けては身が持たない、蛇と共に何とか大剣から逃げ出し蛇に命じる。
それに従い蛇は口に妖力を溜め――僅かに空いた口の隙間に紅い石が入り込み、爆ぜた。
ならば使役者である己が術を行使するしかなく、その為には最低でも一拍動きを止め

る必要がある。
妖力を練り、術を構築し、発動するという過程が必要なのだ。
だが眼を凝らさねば見失ってしまう程の速さで動き回る刃、それが立ち止まった瞬間に襲ってくる。
既に三度、手足を細切れされ斬り飛ばされた。
何なのだ、一体どうすればいいのだ！
僅かな時間さえ与えられない、視線の先にいる畜生は、魔物は一体何なんだ、己は一体何を相手にしているのだ！
「■■■■■■■■ッ！」
雄叫びを上げ蛇が魔物に向かって突き進む。
使役しているとは蛇にも自我はある。
それは度重なる負傷と苦痛に耐えきれなくなり使役する為の支配が弱まった瞬間に本能に任せた行動に出た。
巨体と勢いに任せた突進、己の意図しなかった行動であるがお陰で魔物の意識は外れた。
魔物は蛇を止めようと爆ぜる礫を何発も打ち込む。
だが捨て身の突進は身体をいくら削り取られても止まらない。

この時、ようやく己は勝ち筋を掴んだ。
妖力を練り、術を構築する、半端なものでは殺しきれない、己の持つ最強の術をぶつけるのだ。
蛇の突進はもう避けられまい、奴は背負う小さな魔物を気遣ってか自ら動くことはこの戦いではなかった。
それが奴の隙となったのだ。
だが衝突まであと少しの所で一本の大剣が天から地面に突き立つ、そして赤褐色の刀身が紅色に染まる。
その後ろで魔物は不動のまま立ち続けた。
まさか、有り得ない――だが己の最悪の予感は当たった。
勢いのまま突き進む蛇が紅色に染まった刀身に触れる否や斬り裂かれ、いや、あれは焼き切られている。
刀身の刃先に触れたものから順に炭となり脆く崩れている。
己は夢を、悪夢を見ているのだろうか。
そう壊れかけの知性で現実を疑うも何も変わらなかった。
頭の先から尾の先まで両断された蛇の死体が魔物の後ろにあった。
捨て身の突進、その勢いを利用され蛇は自ら両断されに赴いたのだ。

そして己は術は構築の最中であり無防備な姿を晒している――見逃す手合いではなかった。
蒼く輝く薄刃、ソレに五体を切り刻まれる。
首を、腰を、腕を、手を、脚を、頭を、腸を、骨を、肉を。
斬り飛ばされる度に、視界は狭まり、意識は暗闇へと進んで行く。
その先に待つのは死、魔物へ堕ちてでも拒んだモノ、そして死を拒んで迄果たしたかった復讐があ――――

◇

傷を治すたびに黒い靄が減少していったから致命傷を与え続ければ殺せるのではないか。
そう考えて、死ぬまで殺し続けたのだが正解だったようだ。
人の形が残っているとひょっこりと甦りそうだからだと即身仏は細切れに切り刻んだ。
その後に残ったのは弱弱しい靄を放つ肉塊だ。
蛇に至っては二枚に卸したがどうすればいいのだろうか、細切れにするしかないのだ

が巨大な分面倒くさい。
少し考えた結果、白い火でまとめて焼いてしまう事にするが……
「――――！」
恨めし気な言葉が頭の中で紡がれていく、その出所は靄を放つ肉塊だった
――煩い、さっさと死ね
聞くに堪えない呪言を呟く肉塊へ向けて白い火を吹きかける。
骨の一欠けら、肉の一片さえ残さず、甦ることが無い様に。
だが幾ら吹きかけても火が燃え移ることが無く、それどころか肉塊が放つ靄が多すぎて火が消えそうになっていく。
「くる！」
チビに後ろから呼ばれる。
いつの間にか元気になって背中から降りたチビ、その視線の先には蛇の死骸があった。
だが蛇の死骸は黒く染まり、全部が黒に覆われると液体になったかのように地面に黒い液体となって広がり肉塊に向けて集まりだした。
そして肉塊は黒い水を取り込むと膨張を始めた。
まずい、非常にまずい。

膨らみ続ける肉塊に向けて火を吹き続けるが分解可能な量を超えて膨らみ続けていく。
恨めし気な声も未だに聞こえている事から即身仏は未だにこの世に留まっているのは間違いない。
現状は非常に危険な状態だ。
目の前には膨張を続ける即身仏だったもの、あれが今から何をするのか全く分からない。
だが碌なものではない事だけが分かる。
最悪の場合、蛇と即身仏が合体して強化されて甦ってくる可能性が出てきてしまった。
そうなってしまえば此処から逃げ出しても島から出ない以上、完全に甦った強化即身仏と再度戦う事になる。
それだけは避けたい、今回は勝てたが次も勝てるとは限らない。
何より即身仏に手札を知られた状態で戦うので此方にとって不利である。
だからこの場で何が何でも決着をつける必要がある。
膨張を続ける肉塊からも漏れ出す黒い靄は白い火を寄せ付けない。
これでは火力が圧倒的に不足してしまっている。

一旦中断し再び喉に力を込める、先程よりも多く倍以上の力を込める。
想像する、単純な炎ではなく黒い靄そのものを燃やし尽くす炎を。
そして吐き出す、火ではなく炎を、火焔を。
喉が燃えるように熱い、焼けるような痛みを感じる、その事を出来るだけ無視して炎を吹き出し続ける。
視界を覆う白い炎、その奥で黒い靄が確かに燃えていた。
方向性は正しかった、だがまだ火力が足りない。
もう少し上げなければ拮抗状態に持ち込む事も出来ない。
身体は限界に近い、それでも無理をしなければ現状を打開できない！
「くるー！」
だが遠くでチビの声が聞こえてくると何故か肉塊の膨張が止まった。
それどころか靄が燃えやすく変化していく。
何してるんだあのチビは！でもよくやった！
視界が届かない何処かで何かをしているチビに向けて二言心で呟きながら残った力を振り絞る。
靄が徐々に白い炎の飲まれて消えていく。
ペース配分を考慮せず、今出せる最大火力を吐き出し続ける。

それからどれくらい経ったのだろか、半日か、一日か、もしかしたら十分も経っていないかもしれない。

だが苦労の甲斐もあって黒い靄は一変残さず燃やし尽くした。

恨めし気な言葉は何処にも聞こえず――目の前にあるのは無色透明な大きなナニかだった。

――ナニコレ

肌感覚では何か悪いモノではない、そんな感じがするが正体が全く分からない。

目の前にある謎の物体を観察していると遠くからチビが口に何かを加えながら走ってくるのが見えた。

心配していた怪我は無く、無事な姿に安心して駆け寄ろうとして――何かが軋みをあげた。

その音は余りにも不吉であり、急いで周囲を確認する。

異常は直ぐに見つかった、空間そのものが軋みを挙げていたのだ。

それだけに留まらず、靄を燃やし尽くした後に残った無色の大きな塊が共鳴するように高い音を奏で始めた。

「くるーーー!?!?!」

「グルァァァァァァァァァァァァァ!?!?!?」

やばいやばいやばいやばい?!?!?

本日何回目か忘れた、その中で最大級の警告をだす本能に従う。

チビを急いで捕まえて背中に載せると残ったすべての力を振り絞り急いで森から離れる。

そして森の中心、無職透明なナニかから光が溢れ――

どなどなどな

流木に捕まって海を漂う、真冬の雪が降る極寒の中で。
これは頭がいかれた事で行う奇行ではなく、物事の成り行きでそうせざる得なかっただけだ、自らが望んで行っている事では決してない。
海水の冷たさが骨身に染みそうなところだが、自前の毛皮が何とか水を弾いているが長くは持ちそうにない。
急いで捕まっている流木に身を載せるが後脚はまだ海中に浸かっている。
念力で近くを流木を集めると同時に大剣の欠片を高速回転させ中身を削り取り浮力を稼ぐ。
寄せ集めた流木に突起を作り急いで組み立て全身を載せる事が出来る筏を組み上げる。
全身を海中から出し濡れた身体を乾かす――その最中に遠くから全身を轟かせるような音が響いてきた。
音の発生源に視線を向ければ寒中水泳をする事になった原因、跡形もなく吹き飛んだ島があった。

だがあるのはめくれ上がった島の大地に島の中心から吹き上がる噴煙が空を覆っていた。
ついさっきまで島にいて殺し合い等をしていたはずだが島の面影は何処にも無かった。
途方に暮れるしかない、森と海辺に作った拠点も備蓄食料も武装も何もかもが吹き飛んだ。
島を吹き飛ばした程の爆発に巻き込まれながら生きているのは奇跡――ではなく大剣を盾にしたり、大剣以外の武装のを放り出して全身強化に集中したおかげだろう。
それでも最後には吹き飛ばされ海に投げ出されたが生きているから良しとしよう。
そう思い込まないとやっていけない。
生活の拠点も島そのものも吹き飛んだ、これでどうやって今後生きていけばいいんだよ！
そもそも即身仏倒したら島が吹き飛ぶってどうなってんだよ、あれか、死なば諸共って考えで何か仕込んでいたのかよ！
そして大海原に放り出されてこれからどうしたらいいんだよ、クソミイラが！
頭の中では次から次へと怒りと罵声が沸き上がる。
だが幾ら心が荒もうと現実は何も変わらなかった。

「くる～……」
聞き慣れた声が聞こえて
傍らにいるチビは身体を縮込ませて落ち込んでいるように見えた。
「グルル」
チビの頭に顔を寄せる、お前のせいではない、その思いが伝わるように。
寧ろチビは巻き込まれただけであり、その後は膨張を続ける肉塊を何らかの方法で中断させた。
考える程に落ち込む理由は無く、寧ろ助けられたから私が感謝するべきだろう。
だがそれを伝える筈の言葉通じない、その代わりに落ち込むチビを尻尾で優しく包み込む。
今更ながら自分の尻尾はかなり大きく、チビを包んでしまえるほどの長さもある。
そしてチビは何時も勝手に尻尾を枕にして寝るのが好きだった。
そうして優しく慰める様に包んでいるとチビは尻尾を枕にして小さな寝息を立て始めた。
その姿を見て安心すると同時に釣られるように自らも大きな欠伸をしてしまった。
流石に限界が来た、立て続けに大量の力を消費し、肉体も酷使してかなり疲労している。

幸いにも海は荒れておらず波も穏やかだ、筏が崩れる心配はしなくてよさそうだった。

身体を楽にしてチビの傍で眠りにつく。

森は消し飛び、島のは土台から吹き飛んで帰る場所は無くなった。

それでも生きていれば何とかなる、そう考えて瞼が落ちるまで島であった場所を見続ける。

潮の流れに身を任せ小さくなっていく島、胸に沸き上がる気持ちは何なのか自分でも理解できなかった。

◇

「……、……、……、くる～」

遠くから声が聞こえ、何かが顔を叩く感触がする。

ぺちぺちと叩く感触からしてチビの肉球であることは間違いない。

それでも未だに眠気が強く、チビを無視して起きかけた意識がまた深く眠っていく。

「くるっ！」

「グァッ!?」

チビが耳に噛み付いた、かなりの強さで。
ガリッと相棒の耳を噛めば突き抜けるような痛みが頭に駆け巡り二度寝しかけた意識は無理矢理に覚醒された。
眼を覚まし代わりとしては痛すぎる噛みつきに恨めしい視線を送るがチビは意にも介さず、それどころか気付け替わりなのか小さな鼻先を脚で叩いて来る。
頭を振ってチビを振りほどくと頭と首を回して辺りを見回す。
そうして漸くチビが早く起こしたがっていたのか、その理由が分かった。
載っていた筏は壊れることなく海を渡り切ったらしく砂浜に乗り上げていた。
後には海があり、前方には砂浜に遠くに山が見え陸地に流れ着いたようだった。
筏からチビと降りると波の音と遠くからは鳥の鳴き声、そよ風が木々を揺らす音が耳に届く。
足元には砂を踏みしめる感触が確かに伝わってきて五感で感じる情報が目の前の光景が幻ではなく現実であることを伝えてくる。
その事を理解するにつれて胸から喜びが溢れ――る前に盛大にお腹が鳴る。
傍ではチビも同じようにお腹を鳴らしている。
先ず最初に行うべきは空腹を鎮める事だった。

腹減った

ポリポリと魚の干物を食べながら砂浜を歩く。
塩辛さと天日干しが不十分な事による若干の生臭さに鼻を顰めつつも胃袋に収めていくが全く足りない。
今食べている干物は備蓄していた物の中からチビこっそりとちょろまかし隠し持っていた代物である。
チビはなんと即身仏が使っていた自分の影に物を収納するのと似たような能力を隠し持っていた。
能力そのものはそこまで大したものではなく収納できる量も多くは無い、隠していた食料も半日に満たない量である。
それでも四次元ポケットの様な能力は羨ましい。
使い方は残念ではあるし多分、もしかしたら食意地が張っていたから出来るようになったのかもしれない。
しかしチビの隠し持っていた食料のお陰で空腹よりかはましな状態で動く事は出来た。

次からはチビに食料を保管させるべきだろう、食料含めた何もかもが島と共に吹き飛んで味わった苦い思いは二度としたくはない。
それにしてもこの砂浜はかなり遠くまで続いていそうである。
歩けども長い砂浜が続き偶に折れ曲がるように続いているから全貌が全くつかめない、もしかしたら島ではなく大陸の可能性もあるが現状では確証が持てず何とも言えない。
これはどちらに進むべきか棒倒しで決めたが間違っていたのかもしれない、それでも情報がない中で長々と悩んでも無駄ではあるしどうすればよかったのだろうか。
……最後の手段としては勘の鋭いチビの気の赴くままに歩き回るのもアリかもしれない。
それ以前に今後の身の振り方をどうするか決めなければいけないがそれが一番の問題だった。
住処に関しては地形操作でどうにも出来る。
食料は海が傍にあるからガッチン漁で獲れる。
冬の寒さも毛皮と力で何とかなる、よって冬支度に急いで取り組む必要がない。
正直に言えば急いで何かをする必要性がない。
敵意マシマシの島の獣の様な奴らが大挙して押し寄せてこない限り行き当たりばっ

たりでもどうにかなりそうなのだ。
ならば当面の目標は住みやすそうな場所を探すことにするべきだろうか……、あー、考えるのめんどくさい。
即身仏との一連の戦いで疲労した脳と体は完全には回復しきっていないし、空腹によって碌に頭が回らない今の状況が一番の問題じゃないか？
「くるッ！」
そんな事を考えながらふらふら歩いているとチビが何かを見付けたのか元気な声を張り上げた。
チビの視線の先には砂浜を覆い隠すように灰色の何かがいた。
立ち止まって観察してみると灰色の何かはアシカのような、どちらかと言えばテレビで見たトドに似たような生物だ。
大きさもチビ以上、自分以下のそこそこ大きさで身体はでっぷりとしていて見事に肥えている。
それが軽く見回したところ五十頭以上集まり群れを作って砂浜にたむろしている様だった。
はてさてどうするべきか。
砂浜を塞ぐようにして群れが広がって休んでいるがそれを避けて進むか、無理矢理横

断するか。
　手持ちで残った武装は薄刃が三振り、大剣の柄の部分だけが一振り、礫に至っては残弾ゼロである。
　見た限りではそれほど強くは見えず、そうでなくとも戦って死ぬことは無いと思う。
　しかし相手の能力が分からない以上戦う必要はなく、余裕のない今は群れを避けて移動したほうがいいだろう。
　チビに一声かけて群れを大きく迂回する方向に歩き出す、群れを刺激しないようにゆっくりと穏便に避けるように動く。
　しかし群れの中の一頭が此方に視線を向ける、するとまだ距離があるのにも関わらず鳴き始めた。
「オウッオウッ」という鳴き声に加え「オウーン」という怪獣みたいな鳴き声を一匹が発する、すると群れ全体に鳴き声が波及していき五十以上からなる鳴き声尾の大合唱が始まった。
　どうやら群れ全体が警戒態勢に入った様で群れ全体から多くの視線を向けられているのを感じる。
　そして大音声の合唱が弱まるに連れ群れからの能力の発動に伴う独特な気配を感じ始める。

気配の発生源、其処ではトドの頭上で大きな氷柱が作られていた。
流石に危険を感じたので引き返そうとするが、動き出すよりも早く氷柱が撃ち出される。
氷柱自体の速度は大したものではなく狙いも甘い、軽く横に動くだけで避ける事は出来た。
その景色を群れでも確認したのか、最初の一発を皮切りに何頭ものトドが氷柱を撃ち出してきた。
弾幕を張るように撃ちだされる氷柱は外敵に対する威嚇の一種なのか、それとも此方を仕留めて食べる為のものなのかは分からない。
空気を震わせる程の大音声を出す群の戦意は高く氷柱は今も尽きる気配を感じさせることなく撃ち続けられる。
飛来する氷柱をチビと共に氷柱を躱すがともに余裕はまだまだある、それにどうやら外敵に対する威嚇射撃みたいな感じがするが実際の所どうなのだろうか。
暫く氷柱除けに勤しんで群れを観察するがイマイチな働きの頭では分からなかった。
それでも逃げ出さずに観察を続けたお陰で相手の力量を大体図る事は出来た。
武装を展開し薄刃を二振り放つ。
試しに一回戦ってみて、出来れば今晩の夕食に何匹が仕留めたい。

切実な願いの元放たれた薄刃をトドは認識できていないのか防ごうとする動きは見られない。
それならそれでいいと進路はそのまま、そして多少の抵抗を感じるも難なく薄刃は太い首を斬り裂いた。
切り口から大量の血を噴き出してトドは悲痛な悲鳴を挙げるが体格が大きいだけあって一撃で仕留めることは出来なかった。
それでも返す刀で薄刃を切り口に再度斬り付け胴体と一体化した首の半分近くを斬り裂く。
そうして一線を超えた致命傷を負ったトドは声を上げる事もなく音を立てて崩れ落ちる。
一匹目で感じた手ごたえを元にして二匹、三匹目に刃を振る舞い仕留める。
瞬く間に三匹もの仲間を仕留められたことが衝撃的なのか群れから聞こえる鳴き声は小さく萎み、氷柱も打ち込まれる数も減った。
それでも群の戦意はまだ残っている、それを崩すために大剣の柄を一際大きな個体に向け撃ち込む。
礫の要領で撃ち出した柄は眼球を貫き、その奥にある脳を射抜いた。
そして叫び声も上げずに突然倒れた個体を見るなり群が騒めきは静かになっていき

一部が海に向けて逃げ出した。
逃げ出したとトドに釣られ群れの中から一匹また一匹と海へと向かっていく、そうして僅かな間で砂浜に広がっていた群れは生きている物は一匹残らず消えてしまった。
それを見届けると仕留めた獲物に近付く。
最期に仕留めたのは群れのボスであったのか、大きさだけでなく牙も立派なものだった。
ボス以外のトドも大きく、これで夕食に十分な量の肉を獲る事が出来た、
「くる？（どうする？）」
期待に目を輝かせたチビは今か今かと料理が始まるのを待っている。
その食い意地に呆れながらも薄刃でトドの解体を始める。
日はまだ暮れていないが初めての獲物である、解体に慣れていない事と量を考えて早めに取り掛かったほうがいいだろう。
あと自分も魚の干物では到底満足出来ず、速く食べたいと思っていた所だった。
トドの肉を切り分け焼いて食べる、二匹の魔物が食事をする奇妙な風景を風下から伺うものがいる事に二匹は気付くことが無かった。

◇

寝床に降り注ぐ朝日と共に目を覚ます。
即席で作った寝床は夜風はしっかりと防ぎ寝る事は出来た。
それでも寝ている傍からじんわりと身体に伝わってくる冷たさは堪えた。
自前の毛皮で一応耐えられるが限度の一歩手前だったから次からは枯草を下に敷き詰めることを決意する。
背中の毛皮の上で寝ていたチビはまだ眠そうであったが無視して起こす。
寝ぼけ眼のチビが背伸びをしている横で同じように背伸びをする。
その最中に自分の影に向かって脚を伸ばす。
脚は影に触れ、脚裏には冷たい地面の感触があるだけだった。
どうもイマイチ感覚が掴めない。
昨日知ったチビの物を収納する能力、本人（本獣？）が使えるようになったのは問い詰めた処偶然だったようだ。
チビは自分とコンビを組む前は独りで森を生き抜き、食料を他の獣達に見つからないように色々な場所に隠す習慣があった。
それはコンビを組んで狩の獲物にありつける様になっても変わらずに慣習として隠していたようだが、気付けば影に隠していた？ようだったらしい。

言葉で意思疎通出来ず、鳴き声の強弱によるコミュニケーションの為詳細は分からず言っている内容が違うかもしれない。

それでも何とか理解に努め、試しでチビに倣って同じ様な事をしてみるも何も起きなかった。

流石に一発で出来るとは思わないが、せめて取っ掛かり位は掴みたかったがそれもなかった。

残念ではあるが、収納の能力を習得するのは当分諦めてチビには倉庫として頑張ってもらおう。

空間事態は小さいらしいが食いしん坊なチビの事だから食べ物で限定でかなりの量を保管できるかもしれない。

幸いにも食べきれなかったトドの肉が大量に残っている、拡張訓練として押し込んでみよう。

「くるッ!?」

一足先に寝床から出たチビから叫び声が聞こえてきた。

声の調子から何かに驚いているようで危機感は含まれていない。

もしかしたら燻製に失敗したのだろうか、かなりの量が残っていたから試しに作ってみたのだがうろ覚えの方法が間違っていたのか。

それともチビが燻製を勝手に味見して火傷でもしたのか、身体を十分に伸ばしてから寝床を出て燻製を作っていた場所に向かう。
それにしても昨日仕留めたトドは中々食べ応えがあった。
分厚く斬ってステーキにして食べれば湧き出る肉汁と油が疲弊した身体に染み渡ってとても美味しかった。
肉だけでなく内臓もぶつ切りにしたホルモンは美味しく、流石にレバーは栄養素を考えて生食してみるが塩かごま油が欲しくなる様な味だった。
総じて戦いで消費した身体と力を十分に回復させられるものだった。
だが仕留めた数が多く昨日食べきれなかった分は血抜きをして外に干す事にした。
それを朝ご飯として食べよう――そう考えていたが、肉を干していた場所には何もなかった。
一足先に付いていたチビも信じられないのか何度も周りを歩いて肉が落ちていないか探している。
だが何も残っていなかった。
燻製も毛皮も干していたトド肉も、昨日仕留めたトドの何もかもが無くなっていた。
砂浜から内陸に向かう隠蔽を施された足跡を残して。

ゴメン、悪かったから

浜辺から連なる森の中、未明の朝日が挿さない森の中は薄暗く見通しは悪い。
それでも周囲から辛うじて入る僅かな光で物の輪郭程度は分かる。
そんな森の中を静かに、しかし迅速に進んで行く一団があった。
肉好きは余り良くなく、痩せ細った身体ではあるが山の中を歩くには十分な力はまだ残されている。
そんな彼らが残った力を振り絞り誰もが背負うものが魔獣の肉、そして彼らが急いで森の中を歩き続けなければならない理由でもあった。
「なあ、本当に大丈夫なのか?」
「しつこいぞ、もうやってしまった後だ」
その集団の先頭を歩く壮年の男性、無精髭と鋭い目つきを持つ男は先程から不安げに訪ねてくる男にうんざりしていた
「それに今更コレを戻したところでどうなるか分からん馬鹿でもないだろう」
「そうだ、そうだな……」
「大丈夫ですよ、私はともかく林爺がいますから」

不安が色濃く残る男、一団の中で最も多くの魔獣の肉を運ぶのは村一番の力持ち、だが生来からの臆病者であり村の誰からも力の持ち腐れと言われる男でもあった。
そんな男を励ましているのが未だ幼さが抜けきらない少年、一団の中でも特別な生まれを持つ筈であるが薄汚れた顔をしてることからも特別扱いはされていない。
それでもこの一団にいると言う事は必要な力を持っているに他ならない
「後どれくらいだ」
「もう間もなく」
少年から先頭に立つ男へに質問、不安げな男とは違い丁寧に答える様は彼等の立場を明確に表したものである。
しかし今現在に関しては一団の責任者は男になっており、そうせざる得ない事態が起こっていた。
「もう少しだ、立ち止まるな」
声を抑えての少年と男の問答ではあったが、それを聞いた一団が少しだけ速度を上げる。
だがまだ不安であった壮年の男は一団に聞こえるように、しかし声量をなるべく抑えて一団に告げる。
その言葉が発破となったのか森の中を進む足がさらに速くなる。

この分だと夜明け前に辿り着けるだろう。
そんな一団を率いていく男を眺めながら少年は少しだけ歩く速度を落とす、そうして最後尾に近付く少年は最後尾にいる一団の中で最年長の男に詰め寄る。
その顔は不安げな男を慰めた時とは全く異なる、不安げな表情をしている。
「足跡は大丈夫か」
「無論手抜きは無い、無い筈ですが……」
少年に答える老人の言葉にはいつも感じられる自信が全く感じられない。
何時も口煩いくハッキリと物申す男が此処まで口を濁すのを少年は初めて見た。
しかし、それだけで自分達が置かれている現状が良くないモノであると自覚できてしまった。
「そうか、分かった」
「でしたら、そのような顔をしてはいけません」
不安げな少年をたしなめる老人、それを聞いて少年は笑う。
この様な状況であっても自らの責務を忘れる事もなく物を申す男は筋金入りだ。
ならば自分が落ち込んでいては……、そうして少年は一団に追いつくように足を動かす。
そして、ふと森をみれば見慣れた風景に変わっていた事に漸く気付いた。

「もう少しだ、結界に入れば……」
もう少しで帰れる、そう考えるだけで重くなっていた脚は少しだけ軽くなったように感じた。

◇

「くるッ！」
朝食を奪われた怒りと悲しみを燃料にしてチビは森の中を歩く。
昨日仕留め、丁寧に干した獣の肉の匂いを辿り、時々立ち止まっては辺りの匂いを嗅ぎ再び歩き出す。
その足取りに迷いはなく、いずれ肉泥棒に追いつくだろう。
「グルル……」
そんなやる気に満ちたチビの後ろに付いて行くように歩いているが、成程、地面にはそれらしい足跡が隠されていた。
かなりの纏まった頭数で肉を持ち帰ったようで地面に生える草木が圧し潰されている。
もう二三日すれば消えていくものでがあるが今であればハッキリと見える。

無論相手も追われるのを分かっているのか隠蔽には気を使っているようで見つけるのには苦労したが。

この足跡を見るに相手は猿かゴリラの類かもしれない。

島にいた奴らは地球の生き物とは似ても似つかないが便器上そう呼んではいる。

特に猿、小さく集団で襲い掛かり時には獲物を横取りする憎たらしい畜生には散々手を焼かされた。

対抗する為に薄刃を作って手数を増やす必要に迫られ、時にはチビを食い殺そうとした。

群を幾つが潰したが、此処にも似たような獣がいるなら手を焼かされるだろう。

反対にゴリラは与し易かった。

基本的に単独、力自慢なのか正面から向かってくるので落とし穴に落として大剣で頭を潰せばよかったので楽だった。

しかし肉の味はなんとも言えずは焼くより煮物で食べた方が良かったかもしれない、それでももったいないから全部食べたけど。

「くるッ?」

そんな事を考えていると先を歩いているチビの足が止まった。

肉泥棒に追いついたのかと思って見ればそうではなく、不思議そうにして辺りをくる

くると回っていた。
そんな姿を暫く見守っていると何かに気付いたのかチビは目の前の空間を睨みぐるぐると唸り声を上げ始めた。
チビの睨む先には何もない……、様に見えるが薄く、まるで膜の様なものが其処にはあった。
睨むばかりで膜には触れようともしないチビ。
こう見えて何かしらの危険を感じ取るチビの勘の良さは何度も助けられているので信用している。
そのチビが警戒している事から見に迫る危険か敵対的な獣の接近を警戒して戦闘態勢をとる。
しかし、どれだけ経っても目の前膜は何も変化を起こさなかった。
隣のチビを見れば、こちらも何が何だか訳が分からない様子。
暫く互いに見つめ合い、試しにと礫を拾って投げてみる。
何時もの感じで礫を飛ばしたが膜にぶつかるような抵抗は全くなく礫は膜を素通りするだけだった。
礫だけでなく土や木の枝も投げ入れてみるが素通りするだけ、これにはチビも益々不思議そうな顔をするだけになった

試しに脚先を膜に触れさせてみるが此方も素通りした。
「くるるッ!?」
チビが驚くのを横に全身を膜の向こう側へ入れてみる。
全身が膜を潜り抜けたが体調には何の変化も無くこれといった痛みも感じなかった。
だがチビは膜に触れるのが嫌らしい、脚先で膜を突いてみたり手前でウロウロしてするだけで一向に入ってこない。
もしかしらチビの様な獣が入るのを嫌がらせるのが膜の役目かもしれない。
そう考えて口にチビを加えて強制的に膜を潜らせてみとやはり自分と同様に何かしらの悪影響も無いようだ。
「くるる〜!」
嫌がるチビを無理やり潜らせたことは悪いと思っているのでチビ怒るのは仕方がない。
それでも暴れた状態は危ないので落ち着くまで咥えて暫くすると大人しくなった。
チビも激しく揺れる事が出来た事から身体には何らかの不調が起こっていない事が分かったらしい。
暴れるのをやめる代わりにジト目で睨んでくるチビを口から離す。
しかし地面に降りるや否や直ぐに身体によじ登り耳を噛まれる。

ガジガジと耐えられるギリギリの痛みで噛んでくるチビ、振り落とすことなく受けるのは気分を害してしまった詫びでもあるがそろそろ離してほしい。

そして不満を発散したチビは噛むのを辞めると今度は背中に張り付くように乗ってきた。

「くるッ！」

進め！ともいえるような鳴く声を上げるチビを背中に載せて私は膜の向こう側へと足を踏み出して行った。

な・に・こ・れ

森の中に張られた結界、その中には人口が１００にも満たない小さな村がある。
農地もそこそこあり、水源も近くにあると立地に関して言えば恵まれているのだろう。
だがそれが豊かさに繋がるとは言えず、この世界特有の問題に加えた様々な事情によって裕福とは言えない。
数年続く厳冬による農作物の収穫の悪化、周辺に出没するようになった魔獣達、何よりいつ終わるとも知れない戦によって村には暗い影が付き纏い続けて来た。
それでも今日、村の豪族である猪俣（いのまた）の屋敷に集まった村人達にの顔には久しく見ることが無かった笑顔が溢れていた。
「川島（かわしま）？利長（としなが）この度の働き、誠に見事であった」
「有難きお言葉です」
猪俣（いのまた）家当主、猪俣（いのまた）？慶克（ちかかつ）は屋敷の庭、其処で開かれた論功行賞の席において上座に座り眼前で首を垂れる男の功績を述べる。
男の傍らには山と積まれた魔獣の肉があり、それらは村人全員の腹を満たすには十分

すぎる肉の量であった。
それらを入手した一団を率いる男に村人達は感嘆の声を上げる。
「魔獣の肉は分配を行うがそれは林(はやし)が行う、村の長達は任せたぞ」
「分かりました」
一団の最年長であった林は各村の村長を集め屋敷を離れる。
それとは別に当主である猪俣(いのまた)?・慶克(ちかかつ)は川島(かわしま)?・利長(としなが)とその一団にいた少年猪俣(いのまた)?・歳通(としみち)を連れ屋敷の奥まった場所に進んで行く。
だがそれを気に掛ける村人達は一人もいなかった、誰もが魔獣の肉の分配の方が大事であったからだ。
そして屋敷の奥まった場所、人払いの済んだ部屋で三人は顔を突き合わせる。
その表情は庭での論功行賞とは打って変わり重苦しい静寂が支配していた。
だがその静寂を最初に破ったのは当主である慶克であった。
「利長、今年の冬も厳しいがこれで何とかなるか……」
「大丈夫でしょう、問題は海牛を仕留めたのが我らではないと言う事ですが」
「その辺りは口止めをしているな」
「はい、念入りに」
当主の言葉に利長は嘘偽りも無く答える。

その言葉に一応の納得をした慶克は覚悟を決め目下最大の問題、海牛とは別に現れた新たな魔獣についての話し合う。
「さてお前達が見たという魔獣、どんなものだ」
「遠目で見た限りですが海辺に集っていた海牛共を一方的に仕留める程の強さ、見た限りでは余力を残した状態で。奴の強さは正確に測れていません」
「海牛共をアレだけ仕留めてまだ余力があるのか……。歳通、お前はどう見た」
慶克は利長の強さには信を置いている、だが純粋な武とはまた別の霊術を行使できる三男、歳通の意見も聞く必要があった。
「魔獣以上、そして妖に近いモノと考えます」
故にその答えを聞いた慶克は頭を抱えてしまいたかった。
だが当主である自分がその様な情けない事をするわけにはいかない。
ならば利長のせいかと言われればそれも違う。
どうであれ現状において利長が行ったのが最善策であるのは間違いなく、自分が代わりに其処に居ても同じような判断を下しただろう。
ならば今後考えるべきなのは新たな魔獣に関してだ。
「村には知らせずにいるべきか「恐れながら申し上げます！」
だが現状は想定よりも早く進んでしまっていた。

火急の知らせ以外で入ることが許されない部屋に入って来たのは屋敷の伝令兵、魔獣の肉を運んできた一団にもいた男は顔を蒼白に染めて凶事を運んできた。
「失礼します！急ぎ伝えなければいけない事が」
「何事か！」
「結界超えて侵入してきたモノが現れました！」
その一言で三人の背筋には冷たい物が差し込まれた。
行くらなんでも早すぎる、それ以前に結界を超えてきたと言っていなかったか!?
「馬鹿な、魔獣除けの結界は働いていないのか！」
「確かに結界を張っています！しかし、それを超えて来た何かがいます！」
伝令の表情からは嘘偽りは全く感じられない、それ以前に真面目且つ実直に職務を熟す者にしか伝令兵は務まらない。
ならば今までの一言一句が事実なのは疑いようも無かった。
「……利長よ、兵を集めよ。歳通、貴様も参加せよ」
「はッ」
此処に至っては疑問も何もない、可能な限りの手を打たねば最悪村が滅ぼされてしまう。
それだけの力を持った魔獣が結界を超えて村に侵入してきたのだ。

◇

トンネルを抜けるとそこは雪国であった、という有名な一節があった気がする。
ソレに倣って膜を抜けた先には～、と少しばかり期待していたが相変わらずの森の中であった。
それでも少しばかり変化したことがあったとすれば、隠されていた獣道が見やすくなったことくらいか。
それでも内心では肉泥棒への警戒レベルは一段上昇した。
今迄の獣達の持つ特殊な力は相手に直接何かをぶつけてくるようなものが大半だった。
数少ない例外が蛇の隠密や、蜥蜴の光学迷彩じみた能力だ。
後は多彩な能力を持っていた即身仏か、とにかく肉泥棒の猿は巣を巧妙に隠す能力を持つ特殊個体がいると考えたほうがいいだろう。
そうであれば特殊個体の暗殺はチビに任せ、自分は別行動で群れの注意を引くために暴れる必要がある。
武装は残りわずかだが、それでも地形操作の応用で即席の武器を創り出せば群れの相

手はどうにかなる。
まあ、それも相手の出方によって決めるべきだろう。
そう楽観した考えで森の中を歩いていると遠くから何かの音が聞こえて来た。
一定のリズムで森に響く音、まるで金属同士をぶつけたような音は森の喧騒を掻き消すように響いて来る。
どう考えても何かを知らせる符号の様なものであり、現状から考えれば侵入したのが相手に気付かれたのだろう
――はて、島の猿にこの様な知恵は無かったが、此処の猿にはあるのか？
もしそうであれば一度撤退をして武装を整えてから再度殴り込むべきだろう。
何より此処で逃げて猿共が自分達の方が強いと考えれば舐められる、そうなれば猿の縄張りの範囲が分からない以上今後も食料を持ち逃げされるのは確実だ。
そうなるのは我慢ならないし、分からせるためにも群れを最低でも半壊させておきたい。
森を歩く道すがらに礫を集め貯めると同時に地面の土を操作して即席の大剣を幾つか作る。
一連の作業を見たチビも背中から降りて周囲の警戒を強めながら横を歩く。
そうして森の中を歩き続けると視界が開け――そして目に飛び込んできたのは白い

雪が僅かに残った農地の様なものだ。
「グル？」
森の切り開いたかのような不自然に広がる土地、草も無く、小石が疎らにあるのはどう考えても自然に出来たものではなかった。
「くる？」
チビも目の前に広がる地面に違和感を覚えたのか匂いを嗅ぎ、試しにと地面を掘り始めた。
すると掘り始めた穴はどんどん深くチビの全身がすっぽり収まる所までいき、そこで満足したのかチビが穴から這い出してきた。
出来上がった穴を観察してみるが耕しているのは表面から３０ｃｍもないだろう、その下の土は固く耕されてはいない。
土塗れのチビが身体を震わせて汚れを落としているなか、目の前にある農地だけでなく周りに視線を向ければ似たような土地がかなりの範囲で広がっている。
だが全ての土地が整備されている訳でなく、幾つかは荒れ果てている所もある。
そして農地の近くには木造の家屋が点在し、特に目を引くのが土地の奥まったところにある屋敷のようなもの――其処から何かが飛んできた。
小さく速いソレが目指す先にいるのは自分であった。

飛翔速度からしてもう少しで首辺りに突き刺さるであろう、だが視認できる程度の速度であるので即席で作った大剣を盾のよう構えて防御する。

硬質な物同士が衝突した甲高い音が鳴る、飛んで来たモノは大剣を少しだけ削るだけで勢いを失くしたのか地面に落ちる。

音に驚いて背中に登って来たチビを感じながら、落ちた物を観察してみる――だが何処をどう見ても見間違い無く矢であった。

そして矢を撃ち込んできた屋敷、それと農地にある家屋から動きがあった。

屋敷からは槍の様な物を持った奴等がぞろぞろ出てくるし、農地の近くにある家屋からも手に鍬や鎌といった農具を持ちながら続々と出てくる。

その目は血走っており、遠くからでも必死であることが伺える――それ以前に向かってくる姿をよくよくみれば猿等ではなくどう見ても人間であった、見間違いでも何でもなく。

まさかトドの次に会うのが猿ではなく人間とは――しかもなんか血走った目で見てくるし、身の危険をヒシヒシと感じざるえないし、マジでどうしよう?